

42200

教科書文庫

4
810
42-1925
20000 82068

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

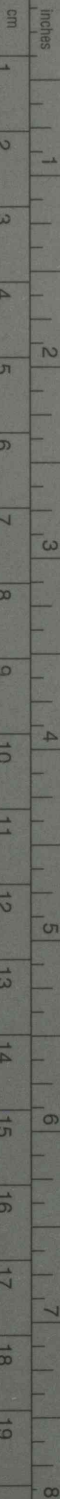


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
天14

大正女子國文讀本

第二修正版

卷二



46
810
大14

日五十月一年四十六大
濟定檢省部文
用科教科語國校學女等高

保科 存一編

大正女子國文讀本

東京 會社育英書院發行



資料室

大正女子國文讀本 卷二

目次

一	明治天皇御製	一
二	太田垣蓮月尼	四
三	富士の遠望 その一	二
四	富士の遠望 その二	二
五	村の秋	三
六	日の岬	三
七	濱の松原	三
八	雀	六

目次

九 故國の町の灯……………島崎藤村……………四

一〇 洋上より……………吉江孤雁……………五

一一 猫の作戦計畫……………夏目漱石……………五

一二 冬が来る……………千家元麿……………六

一三 月夜の天橋……………徳富健次郎……………六

一四 濱口五兵衛の話 その一……………小泉八雲……………六

一五 濱口五兵衛の話 その二…………………………七

一六 濱口五兵衛の話 その三…………………………七

一七 師走日記……………服部躬治……………八

一八 詩二篇……………西條八十……………八

一九 恩師の臨終……………三宅花園……………九

二〇 お早う……………坪野平太郎……………九

二一 硝子障子……………正岡子規……………一〇

二二 子供の時の家……………夏目漱石……………一〇

二三 寒中見舞……………池邊義象……………一三

二四 リンカーンの少年時代 その一…………………………一五

二五 リンカーンの少年時代 その二…………………………二〇

二六 曲り角に立つて……………沼田笠峯……………二四

二七 奥村五百子……………渡邊霞亭……………二六

二八 春近し……………相馬御風……………二七

二九 安宅……………坪内逍遙……………二七

三〇 金が崎……………落合直文……………二八

三一 地方へ移轉した友に……………一〇

三二 雛祭……………武島羽衣……………一五

三三 イギリスの田舎その一……………杉村楚人冠……………一五

三四 イギリスの田舎その二…………………………一六

三五 足柄山の秘曲……………熊田葦城……………一七

大正女子國文讀本 卷二

一 明治天皇御製

とこしへに民やすかれと祈るなる

我が世をまもれ伊勢の大神

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

我が民草のうへはいかにと

兒等は皆戦の場に出ではてて

翁やひとり山田守るらん

四方の海みなはらからと思ふ世に

などなみかぜの立ちさわぐらん

暁のねざめしづかに思ふかな

我がまつりごといかゝあらんと

賤の男がひとり引きゆく小車の

重荷のうへにつもる雪かな

久しくも我が飼ふ馬の老いゆくが

惜しきは人にかはらざりけり

つかさびとまかでし後の夕まぐれ

こゝろしづかに書を見るかな

とのゐ人語らふ聲も絶えはてて

更けゆく夜半に水鶏鳴くなり

池水にちりうく花のかたよりて

か
な
わ
る

ひれふる

ひれふる鯉のかげも見えつゝ

故郷のふるき柱によりそひて

すみしむかしをおもひいでつゝ

初秋の風

夕づく日かげろふ森のこがくれに

ひぐらし鳴きて秋風ぞふく

二 太田垣蓮月尼

蓮月尼は近世の有名なる歌人にして、これを平安朝に輩出せし幾多の才女に比するも、その詩才に於て必ずしも遜色

寛政三年
光格天皇の御
代の年號(三三五)
知恩院
浄土宗鎮西派
の總本山

ありといふべからず。しかも其の一生涯は數奇に富みて語るべく聞くべき節の少からず。尼は寛政三年に生れ幼名をお誠と呼ぶ。父は傳右衛門光古とて、京都知恩院の廣間侍なり。お誠は天性伶俐にして、最も和歌を善くし、且文章も人に優れ、筆蹟さへも麗しかりしかば、兩親の寵愛一方ならざりしが、その母はお誠の幼き頃世を去りぬ。

月移り歳逝きて、お誠は妙齡に達せしかば、江州彦根の近藤何某を迎へて婿となせり。親に仕へて至孝なるお誠は、夫に事へても亦貞淑なりしかば、父子夫婦の間頗る圓滿なりき。とかくする中に、傳右衛門は初孫を抱きて年來の憂を忘る、身となれり。かくて夫婦の間には四人まで子を擧

げたり。さるに如何なる宿世の業にかありけん、四人の子は何れも夭折せり。一家の悲歎言ふべくもあらず。加ふるに、お誠三十三歳の厄年と云ふに、その夫また病に罹りて歿せり。

四人の子を先立てたるだにあるに、其の夫にさへ後れしか

筆蹟
古戰場紅葉
たのちひし太
刀のちひし太
秋ふかき紅葉
しのこるみよ

お誠
蓮月
お誠の
蓮月の

蓮月尼筆蹟

ば、お誠はいたく浮世の無常を感じ、あたら緑の黒髪を切捨て、法名をば蓮月と呼べり。もとより世を果敢なみし身なれば、頭を圓むるにつゆためらふべくはあらねども、かく

ては老先淋しき父の如何に落膽もやせんと、殊更髪を剃りおとさずして、たゞ切下げとなし、且法衣をも身には着けざりしかど、心のみは眞實の尼法師となりて、深く人をも世をも思ひ捨てつ。

されど周囲の人は蓮月を捨てざりき。即ち其の容色の極めて勝れたるより、或は再嫁を勧むる者あり、或は入夫を申入る、者ありて、その煩はしさに堪へざりければ、蓮月は秤の錘もて、我とわが上下の前齒をば悉くこぼち去りぬ。この恐しき振舞によりて、尼の強き決心と堅き節操との知られければ、是より後は、絶えてさる事いふ者なきに至れり。かくて蓮月四十歳の頃、その父身まかりぬ。

たらちねの親の戀しき餘りには

墓にねをのみ泣きくらしつゝ

といふ歌は、此の時詠めりけるなり。父の存命せるばかりに、尼姿とならずしてありしが、今は其の父も世を去りぬれば、茲に始めて純然たる圓頂緇衣の沙門と様をば變へつ。素より貧しき身の、尼となりて、ひたすら佛に仕ふるのみを許さざれば、蓮月はなりはひのたづきにとて、陶器を製造する術を覚え、それに自作の和歌を焼付けて賣りひろめしに、いたく世人のめづる所となりて、蓮月焼の名忽ち世に高まりぬ。此の頃は岡崎に住みければ、其の歌にも此のわたりの景色を詠ぜるもの多し。

岡崎
京都路東、東
に南禪寺、西
ある、聖護院が
白土寺町、北は淨

冬畑の大根の莖に霜おきて

朝戸出さむし岡崎のさと

京ばかりにはあらで、蓮月の名の諸國に廣まるに連れて、弟子入を願ふ人の多かりけれども、蓮月は、敷島の道には定家以前は師匠取と云ふ事はなかりき。たゞ古歌の心を以て師とせられよ。とて、これを辭みけり。されど猶うるさく請ふ者の絶えざりければ、彼方へ移り此方へ引越して、同じ處に二とせとは住まざりけり。因りて誰いふともなく、遂に「屋越の蓮月」と綽名するに至りぬ。蓮月これを聞きて、

浮雲のそこにこゝにと漂ふは

消えせぬまでのすさびなりけり

定家
藤原氏、俊成
の歌人、
新古今和歌集
撰者（一八三二）

西加茂
山城國愛宕郡
神光院
眞言宗、醍醐
寺末に屬す

と詠じけり。而して最後に、北山西加茂なる神光院の境内に庵を結びて移り住みぬ。

露の身をたゞ假初に置かんとて

草ひきむすぶ山のしたかげ

かくて明治八年二月八日、八十五歳を一期として大往生を遂げぬ。

願はくは後の蓮の花の上に

曇らぬ月を見るよしもがな

これ其の辭世なり。家集を「海女の刈藻」と云ふ。

蓮月尼の一生は、人倫の際遇に於て極めて不幸なりき。さ

れど其の貞操の正しく道心の堅かりしは、後の世の婦女子

の鑑とすべく、特に其の和歌に至りては、得易からざる天才として、永へに欽仰すべきなり。

三 富士の遠望 其の一

東海道の富士

昔の五十三次の道中双六や廣重の繪などに現はれて居る富士の姿は面白い。其の起點の日本橋の背景が既に其の白扇で塗られてある。川崎の手前の六郷の渡しあたりにも、相模丘陵を前にして、高く聳えて居る。併し富士の姿と旅客の始めて相對してゐるのは、程が谷の先の信濃坂の上の茶屋であつた。當年の旅客は日毎に其の姿の近くなつ

廣重
安藤徳兵衛、
一立齋と號す
浮世繪師、山
水名所を善く
す (一七七一—
一七九二)
川崎
神奈川縣橋樹
郡。多摩川の
南岸
六郷川
多摩川の末流
川崎附近、往
時東海道、街
の渡船場
程が谷
神奈川縣橋樹
郡。横濱市の
西方約半里



(一) 富士の重

て來るのを樂みにしながら、草鞋脚絆で歩いて行つたのであつた。箱根山中で見る富士は、種々に形がかはつて描かれてある。時には駕籠と雲助の毛脛とを添景にして書き、時には關所と槍とを前に置いて書き、又は湖水と相映對させて書き、又は武士と挾箱とを取合はせて書いてある。三

三島

静岡縣田方郡

薩埵峠

静岡縣庵原郡

薩埵山上の通路眺望絶佳

興津

静岡縣庵原郡

蒲原

静岡縣庵原郡

島田

静岡縣志太郡

富士川

山梨縣笛吹

大井川

山梨縣西八代郡

大井川

山梨縣西八代郡

大井川

山梨縣西八代郡

大井川

山梨縣西八代郡

大井川

山梨縣西八代郡

大井川

山梨縣西八代郡

大井川

山梨縣西八代郡

三 富士の遠望 その一

一三

島から沼津薩埵峠の上は、殊に其の中心で、昔の旅客は皆笠を傾けたり、首を回らしたりしてそれを仰いだ。併し興津以西は、今までとは反對に、遠く小さくなつて行く富士が描かれてある。實際今通つても、蒲原のトンネルを向ふに抜けると、もう富士とは縁が遠くなつて行くのを感じる。私たちが静岡島田あたりで見た富士は、もう餘程小さい。富士川以西の丘陵に、其の半ばは遮られて居る。それでも大井川の蓮臺渡には、やはり其の背景に富士が描いてある。上方から江戸へ向つて來る者も、やはり此の富士を眺める事を樂みにして歩いて來たに相違ない。西から來て、最初

潮見坂
静岡縣濱名郡
白須賀町の東
南にある小さ
な坂

足利義教

六代將軍。義
満の子。赤松
満祐に弑せら
れた(西二
〇)

菊川

静岡縣榛原郡
金谷町大字菊
川

承久の忠臣
土御門中納言
宗行

業平朝臣

在原氏。平城
天皇の皇子。
阿保親王の第
五子。歌人(西
二五〇)

竹の下

静岡縣駿東郡
足柄村の中約
一里

西行

佐藤義清、歌
僧。旅行を好
んだ(二七六)

衣が浦

愛知縣知多灣
の別名。鳴海
から五六里

渥美半島

三河國の東南
隅から西南に
斗出してゐる

伊良胡崎

愛知縣渥美半
島西端の海角

越戸

赤羽根村

日和山

三重縣鳥羽町
の北西に屹立
する一丘。高
さ七八十間。
眺望がよい

に富士を望む地點として著名なのは、これから濱名湖畔に
行かうとする少し手前に在る潮見坂の觀音だが、其處から
は濱名湖の北東部を繞つた丘陵の上に、富士が小さく現は
れて居るのが見える。足利義教は此處で、

今ぞけふ願ひ満ちぬる潮見坂

心ひかれし富士をながめて

といふ歌を詠んだ。それに關聯して、古來東海道を通つて
行つた歴史上の人たちの事蹟が考へられるのも、自然の順
序である。菊川の里で斬られた承久の忠臣も、例の東下り
の跡を處々に残した業平朝臣も、竹の下の一戦で敗れて退
いた義貞も、信長も、信玄も、秀吉も、家康も、みな此の路を通つ

て、東海の富士を仰ぎながら、鎌倉乃至小田原へと志して行
つたのである。西行に富士見西行の名のあるのも面白い。
長く海中に突出して、内に風光明媚な衣が浦を包んだ渥美
半島では、伊良胡崎の東一里にある越戸の大山の上から、鮮
かに富士の姿が眺められる。それは丁度、海を越した志摩
の日和山から眺めた形と同じであるが、さうした絶海の畔
に、思ひがけず其の端麗な姿を髣髴し得たのは、何とも言へ
ず懐かしい。

古來幾多の英雄、幾多の佳人が、或は愁ひ、或は歎き、或は樂み、
或は喜びながら、此の富士を眺めて通つて行つたのを思ふ
と、私は「時」と「歴史」とを前にして、屹然として高く雲表に聳え

て居る山の姿に憧れずには居られない。夥しい變遷だ。今は飛行機が其の半腹の空を凄じく鳴つて掠めて行く。

四 富士の遠望 その二

武藏野の富士

ニコライの高塔
東京市神田區駿河臺にあつたので震災の時に焼失した
十二階
東京市淺草區淺草公園にあつたが震災の時に破壊した
平河天神
東京市麴町區
日比谷
東京市麴町區
白金臺
東京市芝區

武藏野の背景は、やはり富士で塗られてある。繪にもさうした種類のものが澤山にある。尾花が末に描かれた富士、落武者の添景として描かれた富士、近頃になつては、ニコライの高塔や、瓦斯タンクや、十二階等が、其の前景として役立つ。それにつけても、昔の武藏野の様が思ひ出される。皇居の丘陵に平河天神があつて、日比谷の岸に波が打寄せ、白

世田が谷
東京府荏原郡
半藏門
宮城の西門。
麴町區
更科日記
旅行日記、著者ば菅原孝標の女

金臺に沿うて淋しい漁村が連つて横たはつてゐた時分の様が、又は世田が谷から來た往昔の奥羽街道が、麴町を通つて、半藏門をぬけて、ずっと海岸へと出ていつてゐた頃の事が、乃至は更科日記にある竹芝の浦時分の淋しい光景が思ひ出される。其の時分にも旅客はやはり荒涼たる武藏野の末に白く雪に輝いた富士を仰いで、旅をして行つたのである。

富士は今でも東京の帝王である。東京の何處からも富士を取去ることは出来ない。街頭の富士の晴雪は、一日の忙しい勤に疲れた都會の人たちの頭に新しい自由と慰藉とを與へるばかりではない。富士は實際其處からも此處か

駿河臺
東京市神田區
駿河町
東京市日本橋區
富士見町
東京市麴町區
及び麻布區に
ある

太田道灌
名は持資、上
杉定正の臣、
江戸城を築く
兵法に通じ、
和歌にも長じ
た(一〇五二—一四
〇)

らも見える。煤煙の暗く渦を巻いてゐる中からも、だらだらと藁に向つて下つて行く坂の半腹からも、若い人たちが浴衣姿で涼んでゐる夕暮の屋敷町からも、モーターボートの往來する川沿の高樓の欄干からも、又は電車の輕快に走るアスファルトを敷いた街路からも、あ、富士が！かういつて都會の人たちは、憧れるやうにして、到る處からそれを眺める。駿河臺駿河町富士見町、さうした名稱は、總べて昔の人たちが、やはり此の富士に憧れた事を示してゐる。徳川家康が始めて此處に覇府を開いた時などには、殊に此の富士の晴雪が、英雄の心に浸込んで感ぜられたに相違ない。太田道灌はこれを靜勝軒の軒に仰いだ。

靜勝軒
道灌の居館、
江戸城内

蕨驛
埼玉縣北足立
郡浦和の南
一里
丹澤山
神奈川縣愛甲
郡海抜五一
〇尺

多摩山群
東京府三多摩
地方の山群
秩父山
埼玉縣秩父郡
諸山の總稱、
十數峰ある、
海抜各一五〇
〇尺以上

山はみな夜になり行く大空に

富士が嶺のみぞ暮れ残りける



(二) 廣重の富士

にして居るが、これが西北に進むに従つて、丹澤山塊から多摩山群、次第に秩父山塊を其の前に帯びるやうになつて行

或年の冬、私は信越線の蕨驛附近でかう詠んだが、關東平野の處々から見る富士もまた美しい。東京の郊外では、大抵足柄箱根を前景

中川 東京府南葛飾郡。隅田川との中間を流れる。
 稲毛 千葉縣千葉郡。見川町の二里。東京から八里。
 多摩の横山 東京府南多摩郡。多摩川南岸なる丘陵。王子市附近。八王子市附近。海抜六〇〇尺以下。
 東上鐵道 東京市外。山の手線池袋驛から坂戸驛に至る。
 武藏野鐵道 同驛から飯能驛に至る。

く。中川の河口から見た富士は、東京の百萬藁を帯びた形に於て優れ、稲毛の海岸から見た富士は、盤のやうな海と、無数の白帆とを持つた形に於て優れて居る。多摩の横山の上では小さいが、前に清淺晶玉の一水を帶にし、附近往昔の武藏野の名残の林や草原を持つて居るのが好い。武藏野の跡を、今の東上武藏野兩線の駛走する附近に探る人たちは、思ひも掛けず、其の紫紺色に染まつた美しい夕暮の富士を、林の外、又は田舎の垣の縁、又は蚊遣火に包まれた一村の上に發見するであらう。黄熟した麥の畑、又は甘藷の畑、林に沿うた草原路の上に、遙かにそれを發見して思はず驚喜の聲を發するであらう。

蕪村 姓は谷口また與謝。大阪天王寺の人。天明の頃新俳風を興す。(二見云々)
 田山花袋 名は祿彌、小説及び紀行文の名家

粕谷 作者の居村。東京府北多摩郡。
 廻澤・烏山 給田同府同郡

山は暮れて野は黄昏の薄かな
 かういふ蕪村の句があるが、其の黄昏の薄の上に、富士は日に彩られた姿を、さながら繪のやうに現はして居る。
 (田山花袋―山水小記)

五 村の秋

秋は農家の祭日、大事な交際季節である。風の心配もどうやらかうやら通り越して、先づ收穫の見込がつくと、何處の村でも祭をやる。木戸無用、千客萬來の芝居、お神樂、それが出來なければ、詮方なしのお神酒祭。今日は粕谷か、明日は廻澤、烏山は何日で、給田は何日と、皆が指折り數へて浮立つ。

八幡山
東京府北多摩郡

菓子屋
菓子屋
菓子屋
菓子屋
菓子屋

彼方の村では太鼓が鳴る、此方の字では舞臺掛け。一村八字寄合うて、大きくやれば良ささうなもの、八つの字には、八つの意志と感情と歴史があつて、二百戸以上の鳥山は素より、二十七戸の粕谷でも、十九軒の八幡山でも、各自に自家の祭をしなければ氣が濟まぬ。祭となれば、どんな家でも強飯を蒸す、煮染を拵へる、饅頭を打つ、甘酒を作つて他村の親類縁者を招く。今日は此方のお神樂で、平生は眞白な鳥の糞だらけの鎮守の宮も、眞黒になるほど人が寄つて、安小間物屋・菓子屋・鮎屋・おでん屋・菓子屋などの店が出る。神樂は村の能狂言、神職が家元で、村の器用な若者等が神樂師をする。無口で大兵な鐵さん

が氣輕に太鼓を打つたり、氣輕な龜さんが髯髮蓬々とした面を被つて、眞面目に舞臺に立ちはだかる。「あ、ありや龜さんだと、まあ。」可笑盛りのお島が笑ふ。今日自家の祭に酒に酔うた仁右衛門さんが、明日は透綾の羽織でも引つけて、寸志の紙包を懐中して、隣字の芝居へ出かける。毎日近所で顔を合せて居ながら、畑の畔の立話



三多摩
東京府西多摩郡・南多摩郡・北多摩郡

調布
東京府北多摩郡

にも、今日は「今日は」と、抑、天氣の挨拶から、ゆるくと始める
田舎氣質で、仁右衛門さんと、隣村の幹事の忠五郎さんとの
間には、芝居の科白の受取り、渡しよろしくといふ挨拶が、鄭
重に交換される。順番に主になつたり客になつたり、呼び
つ呼ばれつ、祭は村の親睦會である。三多摩は昔から人の
氣の荒いところで、政黨騒では能く血の雨を降らし、氣の立
つた日露戦争時代には、農家の子弟が面籠手かついて、一里
半もある調布まで、擊劍の朝稽古に通つたり、柔道を習つた
りしたものだ、が、數年前に、一度粕谷八幡山對烏山の大喧嘩
があつて、仕込杖が光つたり、怪我人が出來たり、長い間揉め
た以來、これといふ喧嘩の沙汰も聞かぬ。「泰平有象村々酒」

祭が繁昌すれば、田舎は長閑である。

十月は雨の月だ。雨が續いたあとでは、雑木林に茸が立つ。
野良仕事をせぬ腰の曲つた爺さんや、赤兒を背負つたお春
つ子が、箆を抱へて採りに來る。楡茸、濕地茸、稀には紅茸、初
茸は滅多になく、多いのが油坊主といふ茸だ。

一雨毎に氣は冷えて行く。田も林も日にく、色が着いて
行く。甘藷が掘られて、續々都へ運ばれる。田舎には金が
乏しい。村會議員の石山さんも、「一錢違ふ」と云うて、甲州街
道の馬車にも、烏山から乗らずに山谷から乗る。だから村
の者が甘藷を出すのにも、一貫目に五厘も値がよければ、二
里の幡が谷に出すより、四里の神田へ持つて行くといふ風

甲州街道
東京から甲斐
の國に通ずる
街路
山谷
東京府荏原郡
幡が谷
東京府豊多摩
郡
神田
東京市神田區
のこと

徳富健次郎
號は蘆花。文
學者

である。

(徳富健次郎—みゝすのたはごと)

日の岬
出雲大社の東
北にある出雲
山の西端が海
に斗出したと
ころ

六 日の岬

私は舊日本の風光が好きです、人間がすきです、温泉が好き
です、食物が好きです。表の方では内海の景色と、それから
鯛網でとれる鯛が好きですが、裏の方ではすべてが好きで
す。ことに山陰の風光は出ぎらひな私に綱をつけて引張
つてくれます。さして用も無いのに三度までも、あのどす
黒い煤煙だらけの汽車へ乗りこんで、日の岬の果まで出か
けたのは、よく／＼の憧れを持つからではありませんか。
私は、世の中に何が一番嫌ひなといつても、長いトンネルを

ひんがし
（外いし）

倉吉
伯耆國東伯郡
の町

汽車で通るほど嫌ひなことはありません。ひどい時は大
きな魔の手で胸を押へつけられたやうな苦みも感じます。
それが大阪から倉吉まで、……哩數にしたら百二三十哩ほ
どの間に、七十六と、穿りも穿つたり、通るも通つたり、まるで
トンネルばかりの間を駈けて居るやうなものです。が、さし
ものトンネルが、山陰の道中ではあまり苦痛に感じません。
「おや、またお出でなすつたよ。位で平氣で居ます。そのまた
トンネルを出た所は、きつと明媚な風光が有ります。古い
譬ではあるが、苦のあとは樂のある浮世の状態を見せて居
るやうで、一種の感興を催します。
その樂が一寸の間で、また苦の世界へ進み入る。それが餘

倉吉まで
比のしる

り早いので、全く頭痛を感じない譯には参りませんが、そこが自分のずつと太古の先祖の故郷であると思ふと、自然に懐しさが浮んで來ます。乗つて居る汽車の上にも下にも、先祖の足跡が付いてゐるかと思ふと、一々お辭儀したくなります。私は子供の時から大國主命が好きです。「大黒様といふ方は、一に俵を踏んまいて、二につこり笑つて。」と謠はせられた時から大好きです。それは俵を踏へてお立ちになつた御様子が福々しくてよいからではありません。振上げた槌の中から無數の寶が出るからでもあります。私は自ら大黒様の御家來であると信じて居るからであります。少くとも私のずつとく、昔の先祖は、大黒様のお靴

をさげて、大黒様が裏日本を御經營なすつたときのお供をした者であらうと思つてゐるからです。

それなら、少し福の神の御蔭を受けさうなものだといふ人もあるか知れませんが、私はどんなに貧乏でも、三千年前の先祖は大黒様の御家來であつたといふ事を、たとへ先祖から傳はつた鏝一つないにしろ、私の魂はちやんと承知して居ます。だからこそ出ぎらひの私が、山陰まで罷り出て、土の香をかぐのではありませんか。先祖が忠義もし、横着もし、遊びもしたらうと思はれる所々の昔からの面影にあらがれて、そこらを駈け歩いたではありませんか。その中で、一等私の心をそつたのは日の岬です。

伊那佐の濱
出雲國杵築町
の海濱の舊名

日の岬へは、伊那佐の濱から小舟に乗ります。海上三里ほどもありません。少しでも風が吹くと、危険だといつて舟を出しませんから、運の悪い人は二日も三日も逗留して日和を待つことがあります。「これで三度来るが、一度も舟が出ない。」と泣顔して歸る人もあります。

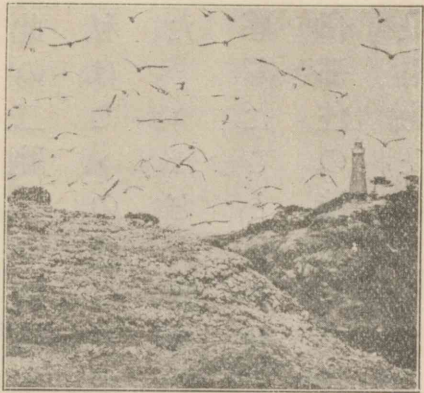
伊那佐の濱は少彦名命が初めて潮に乗つて出て來られた處、武御雷神と經津主神とが、大國主命に國譲りの交渉をした處で、大黒様には最も關係の深い土地、また日本國民にとつては忘れることの出來ぬ靈跡です。私の先祖も、大國主命が國を平げて、初めてこの濱へお出でになつて、御慰勞の酒宴をお開きなされたとき、定めし大いに杯を上げたでせ

少彦名命
大國主命を助
けて國土を
營せられた
武御雷神
經津主神
二神とも天
照大神の命
を受けて出
雲國土を
取られた
大國主命
を使命

う。主命もだし難く、首にかけた出雲石や勾玉をかち／＼といはせて、つまらぬ舞などをお目にかけましたでせうが、此の二神との國譲りの交渉には、どんなに心配したでせう。私はこの濱に立つて、朝日に風ぎわたる海の景色に接したときほど、爽快な、そして懐かしい、そして遣るせない思を感じたことはありません。

伊那佐の濱を出て、日の岬へ行く間には、一つ／＼古い歴史と傳説とをもつた多くの岩が、渺茫たる波濤の間に見えかくれして、我々を送り迎へしてくれます。中にも武御雷神が、ぐづく言つたら、この通り微塵にするぞと威して、海中へ投げられたといふ千引の岩もあります。甲の緘を見る

鼻高山
出雲の大社の
東北にある出
雲山の一名



日の岬の群鳥

やうに、段々刻みになつた甲岩もあります。潮の色も藻の香りも、三千年前の姿をそのままに持つてゐるかと思ふと、自然に起る感激の涙が舷にかゝります。

鼻高山^{ノウカウザン}を右手に見て、岩礁の間から舟路が變ると、そこに日の岬の船附場が見えます。一面の老松、その上に無数の白い鷗が舞ひ遊び、御崎神社の棟木が松の葉がくれに見えます。それを見ると、故郷へ歸つた時のやうな歡喜が胸をついて出ました。向つて右手は茂つたまゝの竹垣で、それが右の方へ五六十間も延びてゐます。

その垣は風を防ぐ爲でもあり、また波を防ぐ用にもなりませう。處々に四角の切穴があつて、そこから人間が出入します。

垣の中には、少くとも二三十戸の人家があるらしく、枯れて白くなつた笹葉の間から、家の棟が見えて居ます。白い炊烟が昇つて居ます。私は舟の首が岬についたとき、三千年の昔をそのままに見せて居るのはこゝである。と思ひました。ずっと前の先祖の住んだ家は、この竹垣——ではない枯れた藪垣で圍はれた、かうした家であつたらうと思ひました。

(渡邊霞亭)

渡邊霞亭
小説家

狩野川
伊豆の天城山
中から發し、
駿河の沼津町
で海に注ぐ

七 濱の松原

狩野川の川口から僅か二三町西へ入ると、全く自然のまゝの深い松原を見ることが出来る。何といふ思ひがけない老松の多いことだ。しかもその老松の何といふ眞直な伸びやかな幹を持つて聳えてゐることだ。見上げるばかりの眞直な高い幹は、伸びくと中空に聳えて行つて、やがてそこで自由に枝を張りわたしてゐる。枝は枝と交はり、二本から三本、三本から四本と連なつて、終に西の方田子の浦まで三四里に及ぶ長い松原となつてゐるのである。その幅は二三町を出ないが、木立が深いから、その中に入つて立つと、いかにも深林の中にあるやうに思はれるのである。

田子の浦
駿河國庵原郡
蒲原町の管内
で、富士川の
左岸にある

沖から吹く土地名物の西風に、幹はいづれも、大抵陸の方へ傾いてゐる。併し、その木全體が大らかに傾いてゐるので、中途から曲りくねつてゐるのではない。この強い西風から被る土地の潮害を防ぐ爲に、指一本松一本といふ嚴しい法度を拵へて、昔この松原を育てたものであるさうだ。松の下草には、雑木の茂つてゐる處がある。雑木の中にも櫨の多い處があつて、此の間からの紅葉は誠に美しかつたが、もう散つたであらう。また、一切他の樹木がなくて、細かな砂原の打開けたあたりに、一面の薄の穂がそよいで、沖からさす日の光に輝いてゐるのも見事であつた。ある處には厚い芝原があつて、高い梢を漏れて來る靜かな日光に、自づ

三保の松原
駿河國安倍郡
の海に斗出し
た洲

と日向ぼつこを思はすやうな處もあつた。さうした林を横切ると、小石の深い濱に出る。眞白な圓い小石が深く積つてゐるので、そこを歩いてゐると、自づと自分の下駄の音に耳を傾けずにはゐられなくなるのが常である。濱からは正面に伊豆半島が伸びて見え、右手寄りには、幽かに三保の松原から遠州路の岬の端が望まれる。風のない日の、この圓やかな海の静けさは、また格別で、ともすると物寂びた池に臨んで

三保の松原より富士を望む



ゐるやうな思も起きて来る。

海に疲れた目を返すと、その長い松原の眞上に、例の眞白に雪を頂いた富士の高嶺が仰がれる。松の木の間を歩いてゐても見えることがある。松原の眞中どころに、その松原の長いなりに、一本の徑が通じてゐるが、その徑を歩き始めると、私はどうしても踵をかへすのがいやになるぐらゐ、それは静かでない徑だ。

松搔きのをみなが唄の老いたるもこの松原の冬にふ

さへや

頭かおもちる外

くもり日は頭重かるわが癖のけふもいで来てあゆむ

松原

〇うしほぞと思ひもかぬる清らけき澄みぬる風をけふ
濱に見つ

未遠くけぶり渡れる長濱を漕出づる舟の一つありけ
り

松原の茂みに見れば松が枝に木がくり見えて大き富
士が根

(若山牧水―静かなる旅を行きつゝ)

若山牧水
名は繁。歌人
紀行文にも巧
である

八 雀

葛飾の秋もたけての事、自然の風物が愈寂しくなるにつれ
て、私も愈寂しい人になりました。障子だけは時々あけ放
して置きましたものの、私はたゞ魂ばかりででも坐つてゐ

葛飾
下總國東葛飾
郡武藏國南
北葛飾郡の地

るかのやうに、寂しい一日中を、何一つ聲を立てなくなりま
した。

床の間には「玉のごと生れたまひて」と云ふ越後の良寛禪師
を歌つた私の軸――それは近所の村のあるお百姓の爺さ
んにトマトの禮に書いてやつたので、その後、素朴な表装を
して見せに來てくれた時、「お前さんが書いたんだから、ちよ
つと見たらよからう。」と、そのまゝ掛けて行つてくれたのを
一つ掛け流して、その前に小笠原の椰子の殻に、白い茶の花
を毎朝一輪づつ挿すばかりでした。紫檀の机の前に坐つ
て、折ふしは椰子の殻の煙草入の中に手を入れます。その
細かな粉を爪さぐる指のかすかな心地、それにも近づいて

良寛
越後の名僧。
國上寺に住ん
だ。天保二年
歿、七十五歳

来る冬の冷たさが泌みて、そのわびしさはありません。訪ねて来る人も滅多になく、雀の歌ばかり考へて居ましたが、ある時ふと廂の方を見てみると、その廂から小さな雀の頭が逆さになつて、一寸私の方を覗きました。「おや」と思ふとすぐに引込めました。私がそこに坐つてゐる事はわかつて、家の中がしんとでもしてしまふと、直ぐにその雀の逆さ頭が覗くのです。

ある時などは何かの拍子で、私がごほくと咳入つてゐると、またその雀の頭が出ました。二つの足で廂のへりを必死につかまへながら、逆様にその頭だけ。私も寂しかつたが、雀もどんなに寂しかつたか。その心細さといふものは

咳すれば寂しかうしか
斬断より雀の頭に
うりまきそ

大地
宇宙
大自然

時間

三崎
神奈川県三
浦半島の尖端
の地

ありませんでした。が、お互に、これが寂しい中のたつた一つの慰めだつたのです。だが、ともすると、その雀が廂からころりと轉げかけて、慌てて縫りつく事もありました。その可笑かつたこと。

海岸では、一岬越えて思ひもかけぬ波打際に、雀の下りて歩いてゐる事もありません。それも麗かなことです。その白い波の壊れは、決してその雀の足元にはとどきません。さういふ雀の、寂しいが安心しきつた姿を見てゐると、如何にも此の大自然の悠久な姿が思はれます。有難いほどゆつたりとしたものです。三崎あたりでは、その海の向ふに玲瓏とした不二の山が、海の果てから天の上にまで、真白く立

り上つてゐます。

雀の用心深い、しかも怖がりやな事は、次の行爲で知れます。圓弧のやうにその先が枝垂れた枯枝の一番高い頂點に、雀が留つて居た事がありました。その雀がその先へ向けて少しづつ下りかけるはづみに、不意にその枝が揺れた、それも極めて幽かな、揺れたと思へぬ位の微弱さでした。だが雀は非常に驚いて、思はず飛びたたうとしました。しかしそれも怖かつたと見えて、そのまゝしがみついてしまひました。そして暫くはふる／＼して居ました。が、そつと二本の足を互ひ違ひに離して、枝を横に、おゞ／＼と向きを變へると、今度は用心に用心をして、少しづつ、ほんの少しづつ、

附根の方へしさり／＼するので、そして一寸揺れると、びくりとして留まり留まり、やつとの事でしさりきつてしまふと、いよく木の股の隅に縮まつて、長い事、たゞちつとしてゐました。それから一息吐いて、そして初めて飛びたつたのです。

だから、二羽か三羽か、雀が一つの枝に留つてゐる時は、必ずその重みに堪へ得てゆらともしない枝か、でなくば主として枝の附根に寄つてゐます。

雀は無論、百姓たちよりも一入早く目が醒めて、朝もまだ日の登らぬしら／＼明けから騒いでゐるものです。所在の竹藪、野寺の笹藪、小丘の孟宗藪などに鳴騒ぐ雀の聲に驚い

て、寒々と咳入りながら、百姓達が彼方此方の藁屋の背戸口をそゝくさと開けたり、手鋏を擔ぎ出したりする頃には、雀はもうとくに勢ぞろへを濟ましてしまつて、それぐの自分の持場に稼ぎに出かけてゐます。

霜のいつばいに下りた冬の東雲頃などは格別です。雀は野良の枯木の上にも、小川の枯草の畔にも、土橋の上にも、群つたり、下りたり、歩いたり、見廻したりしてゐます。まだ小さな雀の子たちは、ほそぐと炊煙のもつれてくる農家の破れた廂などから、ちゝかんで、頭をそろへながら、野稼ぎの親雀たちを見下したり、温かな日射を待ちかねたりしてゐます。澄みきつた平原の空氣の中で、勢よく飛んでゐる雀

の形もいいものです。それが遠くの羽音まで響き返すやうな賑かさが増してくるうちには、百姓達も肥桶を擔いだり、鋏を擔いだりして出掛けて來ます。頬かぶり、破れた青股引で、手鼻をかみぐです。

棕櫚の木が一二本、藁屋根の僅かばかり見える竹林の中からは、何を燃すのか、赤い火がちらちらと動き出して、落葉くさい煙がほのぐと引きはへます。霜の厳しい甘藷畑や青麥の畑の畔などでも、焚火の煙があがります。夜が愈々明けたのです。ともすると、さうした向ふの竹藪の斜め上から、飛行機が一台二台と翼をそろへて、大きく大きく近づいて來る事もあります。廂の上などで目白押をしてゐる子

北原白秋
現代の詩人

雀達の喜びやうといふものはありません。ちやべくさ、ちやべくさ、それは騒ぎ立てるものです。一齊に頭を上に向けて。
(北原白秋「雀の生活」)

九 故國の港の灯

故國 まがくに

水夫等よ、錨を用意せよ。故國は近づいた。吾々の熱田丸は、豫定の時刻に遅れまいとして、神戸をさして急いで居た。その時は、もう遠く、ちら／＼と燈火が見えた。「いかに遅くならうとも、神戸につくまでは眠るまい、みんな起きて居よう。」かく人々は互に言合つた。ほのぐらい電燈に照らさ

れる甲板の上には、たゞ上陸を待ちわびる心のみがあつた。私も甲板の手すり近く行つて、遠く暗い海のかなたに、點々として美しい燈火のかゝやきを望んだ。

「あれが神戸だらうか。」
「いや、あれは明石です。」

と、傍に立つて教へてくれる船員がある。次第にその光は輝を増して來た。あすこにも、こゝにも、といふやうになつた。闇にかくれた山の容は見えないまでも、高く傾斜したらしいところに續く燈火があり、港に満ちた燈火があり、海岸には海岸らしく、それと知り得る燈火の列が、水に接して輝くあたりは、そこがもう神戸であつた。

検査
人り
を
機
香
す

和田岬の燈台近く、吾等の船が到着した頃は、夜の十一時過であつたから、規則通りの検査を受けるためには、翌朝まで待たなければならなかつた。いよ／＼一夜は沖合に碇泊することと定つた。海上の闇をぬうて、幾つとなく燈臺のかけを流れすぎる火の、鴛鴦のやうなのは、あれは漁に出かける船だと氣がつくと、漁船を見ることの多い日本近海の豊かさが思ひ出される。この一夜の碇泊は、日中の入港にも勝つて全く好い印象を與へた。もし私が晝日中着いたとしたら、なるほど神戸附近の山々の容はよく見えたらう。海岸の旅館、その他多くの建物、鐵骨のあらはれたドックなどは、よく見えたらう。多くの汽

船と帆柱と、烟筒と、旗と、赤く塗られた新造中の船と、その間を動くランチ、日本風の荷船、小舟が、ごちや／＼したその港の光景はよく見えただらう。しかし、さういふ煩はしい細目のほかに、何が私の記憶に残つたらうか。夜は違ふ。ほんたうにそこには何物も無いやうで、何もかもあつた。日中に感じ得られたらうと思ふよりは、以上のものがあつた。星のまばらな空が殆ど水と抱きあつて、廣大無邊の暗夜といふものを感じせしめるのは、かういふ晩である。天涯萬里といふ言葉を、そのまゝあてはめられるやうな遠い旅路の末に、東方の果ての果てなる故國の入口へと、漸く辿りついたことを知らせるのも、またかういふ晩

島崎藤村
現代の小説家

である。

(島崎藤村―海へ)

コロンボ
印度セイロン
島の首府で、
良港である

一〇 洋上より

コロンボを出帆してよりもある二晝夜を
過ぎぬ中に船は早や赤道を通過し
て南半球に入り申候
急激に降来る印度洋の夜の空は
は次第に圓味を加へるやうに相成る

仲麿の昔
安倍仲麿が支
那で「あまの
原ふりさげ見
ればかすがな
る三笠の山に
出でし月か
も」の歌な
んだこと

明日、修麿八月十五夜の月
夜、明月、陰曆九月十五夜の月

最初雲の間は月影を認め一時
は知らぬ懐しきを感じぬがその感
じは宵毎に強くなり候て仲麿の昔
も思ひやれ申候今宵も船中にて明後
日は後の名月を賞せんなど樂しき
に語り合ふ事には候
日中の餘りに強く華やかなる太陽の
光と對照して熱帯の月の光は一層

の柔らかなる静けさとき味を中ち其此の
 清涼なる月の光が涯なき波の頭を
 照らすを見し時故郷の山河目の前に
 浮ぶが如き心地しく懐郷の情を
 に止め難く修殊も天高く水塵一と
 りも感づき痛切に味はせ供ものは
 大洋上の月夜の光景と存せられ
 晝間とも船外に何の物音もなき

そ夜更けて後の静けさその静けさ
 の中に立ち上り雲紺の空に高く懸
 る日影を仰ぎ見る時天地悠久の念
 は身にしみごとく感ぜられ修
 又この頃の夜天を樂まよむる南十
 字星俗に謂ふ南極星の出現に赤
 道を越えし當初は水平線遙かに
 南方を眺めやり修るも別に異なる星

影は認め難はざりーがやがて三四日
経過一致一歩へは華やかなる日の
波も沈んでたそがれかゝる天の一方水
より線より餘り高からぬ南の空に曇
らしまつたの星が十字を圍むやうな形
に輝き出づるを認め難き濃き紫藍色の
空が色淡く仄明るまゝ水と接する處
その水平線（ト）を下に見て燦爛と閃く

れらの星の光は如何も懐かき
ものに倣此の十字星の上に黙星とい
ふ二個の稍々小さき星が輝きさうに倣
今此の十字星は十字をや斜り
てその先端波を射るやうに見え存
若し南半球を故郷とする人が年経
て此方よりの帰り途に洋上遠く此
の星の閃くを眺め難はざり必ず胸を

躍らすしと思はれ候我等の夜毎
 に仰き修草一はもはや波石に影
 を没して室の色にも星の配置に
 も異國の感ドは一入深く相成修
 洋上月下ペンを驅つて懐ひを故山
 に馳せ申一修草々々

(吉江孤雁氏の文による)

吉江孤雁
 名は喬松。文
 學者

一 猫の作戦計畫

吾が輩は、今夜こそ鼠を捕つてやらうと思つて、種々作戦計
 畫をめぐらして居たが、夜はまだ浅い、鼠はなかく出さう
 もない。大戦の前だから、一休養を要する。
 勝手には引窓がない。座敷なら欄間と云ふやうな處が、幅
 一尺ほど切抜かれて、夏冬吹通しに引窓の代理を勤めて居
 る。さつと吹込む風に驚いて目をさますと、いつの間にか
 月さへさして、竈の影は斜に揚板の上にかゝる。寝過しは
 せぬかと、二三度耳を振つて、家内の様子を窺ふと、しんとし
 て、昨夜の如く柱時計の音ばかり聞える。もう鼠の出る時
 分だ。どこから出るだらう。

戸棚の中でごとくと音がしだす、小皿の縁を足で抑へて中をあらして居るらしい。こゝから出るわいと、穴の横にすくんで待つて居る。なか／＼出て来る氣色はない。皿の音はやがて止んだが、今度は井か何かにかゝつたらしい、重い音が時々ごとくとする。しかも戸を隔ててすぐ向側でやつて居る。吾が輩の鼻づらと、直徑にしたら三寸も離れて居らぬ。時々はちよろ／＼と穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて顔を出さぬ。戸一枚向ふに、現在敵が暴行を逞しうしてゐるのに、吾が輩はちつと穴の出口で待つて居らねばならぬ。随分氣の長い話だ。鼠は旅順碗の中で、盛に舞踏會を催して居るらしい。せめて吾が輩の入

れるだけ、おさんが此の戸を開けて置けばよいのに。今度はへつつひの蔭で、吾が輩の鮑貝がことりと鳴つた。敵は此の方面へも來たなと、そうつと忍び足で近寄ると、手桶の間から、尻尾がちらと見えたり、流しの下へ隠れてしまつた。暫くすると、風呂場でうがひ茶碗が金盃にかちりと當つた。今度は後方だと振向く途端に、五寸近くある大きな奴が、ひらりと齒磨の袋を落して、縁の下へ駈込んだ。逃すものかと續いて飛降りたが、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは思つたよりむづかしいものである。吾が輩は先天的に鼠を捕る能力がないのか知らぬ。吾が輩が風呂場へまはると、敵は戸棚から駈けだし、戸棚を

警戒すると、流しから飛びあがり、臺所の真中に頑張つて居ると、三方面とも少々づゝ、騒ぎ立てる。小癩と云はうか、卑怯と云はうか、到底彼等は君子の敵でない。吾が輩は十五六回は、あちらこちらと氣をつからし心をつからして、奔走努力して見たが、遂に一度も成功しない。残念ではあるが、かゝる小人を敵にしては、いかなる東郷大將も施すべき策がない。始は勇氣もあり敵愾心もあり、悲壯といふ崇高な美感さへあつたが、遂には面倒なものと、馬鹿げて居るのと、眠いのと、疲れたのと、臺所の真中へ坐つたなり、動かれない事になつた。併し動かないでも、八方睨みをやつて居れば、敵は小人だから、大した事は出来ないのである。

目ざす敵と思つたものが、存外つまらない奴である、戦争が名譽だと云ふ感じが消えて、憎いといふ念だけ残る。憎いと云ふ念を通り越すと、張合が抜けてぼうつとする。ぼうつとした後は、勝手にせよ、ごうせ氣の利いたことは出来ないのだから、輕蔑の極眠くなる。吾が輩は以上の徑路をたどつて遂に眠くなつた。吾が輩は眠つた。休養は敵前に在つても必要である。
〔夏目漱石—吾が輩は猫である〕

一一 冬が来る

冬が来る。

毎晩そとでは、風の荒れる凄^くい音がしたり、

夏目漱石
名は金之助。
小説家。大正
五年歿、五十
歳

又ひつそりと静かな夜がつく。
我等は家の内に、
火を圍んで幸福な時を過す。

永遠な感じのする楽しい冬の夜、

風の荒狂ふ大地の上に、

又は静まりかへる天地の間に

小さな家の内に、妻子と平和に住んでゐる。

親しみ深い冬の氣持、

自分は感謝せずにはゐられない。(千家元麿—太陽の愛)

千家元麿
現代の詩人

一三 月夜の天橋

文珠寺 一名智恩寺、
京都府與謝郡
天橋立切戸に
在る
天橋
京都府宮津灣
の西北岸江尻
から東南に突
出する沙嘴の一
日本三景の一
切戸の渡し
京都府與謝郡
吉津村大字文
津村大字文津
球の海濱、も
と橋立の南な
る狭水道の名

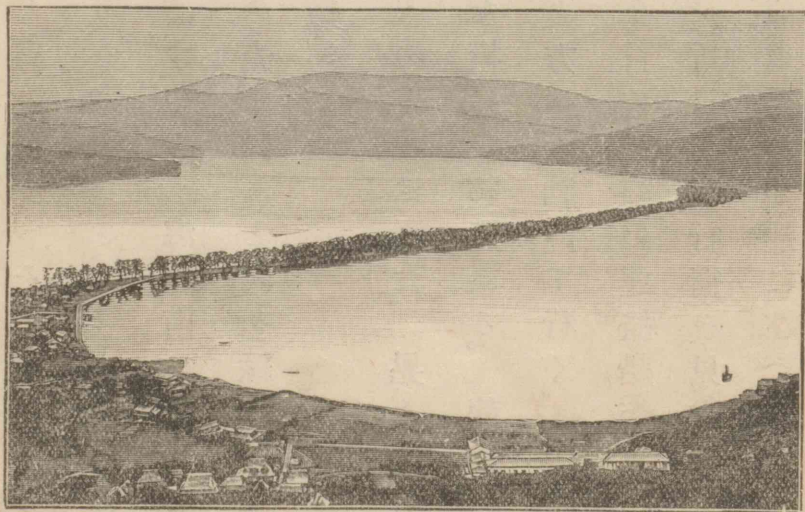
今宵は陰曆十月十四日の月夜である。文珠寺の附近は松影で墨の様に眞黒い。此處に車を待たせて、天橋に渡るべく舟に乗る。所謂切戸の渡しである。ぎいと櫓が響いて、舟は墨染の濃い松影から、白々とした月下の海に出た。海というても、浅い洲の上の水である。何といふ良い月夜か。雲一つない空にはかり照るかと思へば、水中にも天があつて、其處にも月は璧の如く光つて居る。何といふ清い水だらう。月明りにも水底の砂が分明に數へられる。此處は橋立、切戸の渡しか。若しくは天の河を今渡りつゝあるのではあるまいか。「船頭よ、ゆるやかに船をやつてくれ。もつと徐かにやつてくれ。」併し如何程徐かに舟をやつても、

彼岸は近い。するくくと、舟はもう天橋の渚に着いてしまつた。

舟から上つて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らは植ゑついで間もないと見え、松は稚木で疎らである。月光に雪と輝く砂を踏んで、だんく奥へ入つて行く。十一月も中旬と云ふに蟲の音がする。歩むにつれて、松影はだんだん深くなり、はては月光よりも松の影が多くなつた。何といふ明るい月だらう。仰げば松の一葉々々が、白金のピンを數へる如くよまれ、俯く砂には、一葉々々の影が黒く鮮かによみ得られる。松間の道の曲る處に來る。余は松の幹に倚つて立ち、妻は砂に蹲んだ。余は黙し、妻も黙す。

與謝の海
京都府與謝郡
黑崎・登崎間
の入海

ひつそりした天橋立に人籟絶えて、唯何處からともなく、ざあくといふ響がする。天松風か、否、足下の松影は濃い墨もて描いたやうに少しも動かぬ。音響は與謝の海が、天橋一里の白砂を舐める響に外ならぬのである。其の響にひかれて、汀に出て見る。立其處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。並んで腰



宮津
京都府與謝郡

龍宮城
娑羯羅龍王の
宮殿須彌山の
大海中に在
るといふ

を掛ける。月下にはの白く眠る與謝の海。その懷に璧のやうな月を抱き、寢息かとはかり、ざぶり又ざぶりと白砂にこぼれる漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の南に半圓形に山根に沿うて、紅寶石や琥珀の光が、點々と灣を縁取つて居るのは、あれは宮津の町である。³不圖此方の海の上に、不思議なものが現はれた。晃々とした明珠の、幾段にも列んだ彪大な横長い物である。龍宮城の出現と見る間に、それは宮津の方へと動いて行く。龍宮城が移動すると見たは、それは今日の最終の連絡船が、宮津を指して行くのであつた。やゝ暫く其の行衛を見送る。龍宮城はあの宮津灣頭百千の龍燈晃めく邊に、びたりと着

いてしまふた。あとは唯熨したやうな與謝の海。照りまさる月の空と相見て相抱き、一里の松原枝も鳴らさぬ天の橋立の長い汀に沿うて、ざぶり又ざぶりと、漣のさゝめくばかりである。⁴汀から又松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。ざくくと砂を踏む二人が足音の絶間に、波のさゝめきが慕うて來る。幽かに蟲の音がする。松影は益、深くなつて、はては砂の上にごぼれる月影が、ちらくくと螢ほどに細かく疎らになつた。と見ると、此處にひっそりと鎮まります社がある。大方、橋立明神といふのであらう。松影を浴びた其の宮に、人影もない、人聲もない、燈明一つ點つて居ない。二人は其

處の松に倚りかゝつて、黙つてやゝ久しく立つた。

「歸るか。」「え、」。此の言葉の交はされたのは、大分經つてからであつた。肉に居る我等、月の天橋からさへも歩を返さねばならぬ。」

(徳富健次郎「死の蔭に」)

一四 濱口五兵衛の話 その一

この事件の起つた頃、五兵衛はかなりの老人であつた。その家は村での物持であつた上、長い間、村の庄屋を勤めたので、五兵衛は村の人々から尊敬されてゐた。村の人たちはいつも五兵衛を「濱口のおちいさん」と呼んだが、村第一の金持なので「濱口の大盡」ともいつてゐた。五兵衛はいつも小

作人や貧乏漁師の爲になることばかりしてゐた。喧嘩の仲裁から、困つた時の金の立替、時には貧乏人に只同様にお米を賣つてやつたりした。

五兵衛の大きな草葺の家は、一つの灣を見おろした小さい高臺の上に建ててあつた。この高臺は、小さい段々の水田が濱の方へと並んで居て、三方は山に取巻かれてゐた。この土地は、海に向つて、その山の腹から濱邊までえぐり取つたやうになつてゐて、五兵衛の家は、その中程の高臺にあつた。海の方から見ると、細い白いうね／＼道が、段々の田を左右にわけて、下の村から五兵衛の家へと登つてゐた。そして下の村には、灣に沿うて九十ばかりの草葺と、一つの神

社とが並んで居た。

それは秋のある夕方の事であつた。五兵衛は下の村の祭の用意を、自分の家の縁側から眺めて居た。その年は非常に稲の出来が好かつたので、氏神で盛な豊年祭が行はれる事になつた。老人は村の屋根の上にひるがへつて居る大織や、竹の竿についた祭提灯や、神社の森影に見える飾り行燈や、派手な揃ひを着た若い人たちの群を見ることが出来た。その時、老人と一緒に居たのは、小さい十歳の孫だけであつた。他の者は早くから村の方へ下りて行つたが、少し加減の悪かつた五兵衛老人は、孫と淋しく留守居をして居たのであつた。

その日は、秋だといふのに、何となしに蒸暑かつた。そして夕方になると、そよ風が出たが、それでも何だか重くるしい暑さが残つてゐた。そんな日には、とかく地震があるものだつたが、この日も間も無く地震が來た。その地震は別に驚くほどのものでは無かつた。しかし、これまで幾百回となく地震を経験してゐる五兵衛老人には、變に思はれた。長い、のろい、ゆつたりとした揺れやうであつた。多分極めて遠い土地の大地震の餘波であるらしかつた。家はきしみながら幾度か穩かに揺れて、また元の静けさに返つた。地震が終ると、老人の鋭い考深い眼は、氣遣はしさうに下の村を見た。丁度、何ともわからない所で、何となしに少し變

だといふ感じに、思はずある一方に氣が取られるやうに、老人には、何となく沖合の方に、常ならぬ事があるやうに思はれたのであつた。立上つて海を眺めた。海は不意に暗くなつて、何だか、風と反對に波が動いて居るやうだつた。波は沖へ沖へと走つて居た。

忽ちの中に、下の村でも、この妙な出來事に氣が付いた。先の地震に感じた人は一人もなかつたが、この海の動きには皆が確かに驚いた。老人の眼にも、村の大勢が、浪際へ浪際へと走るのが見えた。誰もが、かつて知らぬほど、海水が引きはじめた。これまで知られなかつた、肋骨のやうな哇ワのある砂の廣場や、海草のからんで居る大きい岩底が見て居るまに現はれて來た。が、村の人々は、この意外な引潮が、何を意味するかは知らないやうだつた。

一五 濱口五兵衛の話 その二

五兵衛自身も、こんな有様を見たのは初めてだつた。しかし幼い時に、父が話したことが胸に浮んで來た。何百年の前にあつたといふ傳説でも彼は知つてゐるのであつた。彼には海がどうなるかが解つた。多分この時、五兵衛老人の突嗟に考へたことは、下の村へ孫をやるにかゝる時間の事であつたらう、山のお寺の僧に、大釣鐘を鳴らして貰ふまでに要る時間の事であつたらう。しかしそれは、彼が大切に

とする時間よりは長くかゝるのだつた。老人は孫に向つて大聲で命じた。

「おい忠、早く、大急ぎだ。松火をつけて來い。」

松火は嵐の晩に使ふために、海岸の村々ではどの家にもあつた。子供はすぐに持つて來た。すると老人はそれを擱んで、家から少し下つた田に急いだ。そこには、濱口一家の一年の勞役の酬として、熟しきつた稻の刈束が堆く積んであつた。老人はその近いものに火をかけた。日に乾いた藁は、吹きあげる海風にどつと燃えあがつた。老人は走つて、第二の稻の山に火をつけた。第三の山につけた。一山、一山、忽ちに天に沖する大きな煙の渦が、幾條も、幾條も合し

て空に高く渦卷いた。孫の忠は青くなつて、

「お祖父さん、お祖父さん。どうして。どうしたの。」

と叫んだが、五兵衛老人は答へようとしなかつた。彼はたゞ命の瀬戸にある下の村の四百人の事ばかり考へて居たのだつた。忠は突然泣きだして家の中へ駆けこんだ。その祖父が氣が狂つたのだと思つたのである。

老人は自分の家の最後の稻むらに火をつけると、その松火を投出した。この焰に山寺から鐘が鳴り初めた。村の人は、この鐘の響に、この煙の渦卷に、濱邊から、村を過ぎて、丘へ丘へと、蟻のむれのやうに登つて來た。

日は沈みかゝつて居た。灣の皺のある海底や、斑に土色の

ある大きい砂原の廣がり、最後の夕映がぼんやりと照した。波はまだ沖へ沖へと走つて居た。實際は、老人の思つたほど長くたゝない中に、火消しのための一隊が高臺に着いた。その二十人ばかりの村人はすぐ稲むらの火を消しにかゝらうとした。が、老人は手を舉げて止めた。

「うつちやつて置け。燃やして置け。大變だ。村中皆ここへ來るのだ。」

村中の人々が追々と集つた。若い男たちや子供が來た。元氣な女たちや娘などが來た。それから老人の大方も來た。しまひには上からの合圖に、子供を負つた母親たちが

來た。が、次第に集つた人々は、やはり何事か知らずに、たゞ燃えて居る稲と老人の顔とを不思議さうに眺めて居た。日は沈んだ。

「お祖父さんが氣が違つたんだ。お祖父さんが火をつけ たんだ。」

孫の忠はすゝり泣きながら言つた。

「火をつけたのはおれだ。だが、村ちや皆來たか。」

老人が嚴然と言つた。村の組合のおもだちや、家の主人たちは、人々の顔を見廻はしたり、坂を上つて來るものを數へたりして言つた。

「はい。皆居ます。でなくつても直ぐに參ります。一體

どうしたのですか。」

「来た。見ろ。」

老人は沖の方を指さして、力一杯の聲で叫んだ。

「来た。どうだ。おれは氣ちがひか。見ろ。」

黄昏のうす明りをすかして、一同は東の方を見た。そして薄暗い地平線の端に、まるで海岸のやうな、細い、長い一線を見た。それは見て居る中に太くなつた。線は廣くなつた。忽ちその長い暗がりには、堤のやうに、そして絶壁のやうに聳えて、鳥の飛ぶよりも早く進んで来る。押しかへしの浪だつたのである。

一六 濱口五兵衛の話 その三

「津浪！」

と人々は叫んだ。海がおそろしく盛上つて、山々をとろろかす程の重さで、電を劈いたやうな泡沫と共に海岸にぶつかつた時、何ともいへぬ重い、強い、すべての叫び聲を打亡すところの響がした。一時は、雲のやうに坂の上へ突進して来る水煙のあらしの外には、何も見えなかつた。人々はうろたへながらたゞおびえた。そして再び見直した時、人は、其の家々の上を荒れ狂つて走る白い恐しい海を見た。その海は、うなりながら、土地の五臓六腑を引きちぎつて退いた。二度。三度。五度。海は進んでは退き、又進んだ。

しかしその度毎に波は小さくなつて、だんく、元の海へと歸つて行く、大風のあとのやうに荒れながら。高臺の上には、暫く何の聲もなかつた。一同は下の村の荒廢を無言の中に見つめて居た。投出された岩や、裂けて骨の出た絶壁の物すごさ、家や社のさらはれた跡には、海底からもぎ取られた海藻や砂利がはふり出されてあるむごたらしさ。村は無い。田畑の大部分も無い。濱には家が一つも無い。見るのは、たゞ沖の方に物狂はしく浮き沈みする藁屋根の二つ三つだけである。死を遁れた恐しさと、家と財とを奪はれた悲しさに、人々はたゞ茫然とするばかりであつた。老人が再び言つた。

「稲に火をつけたわけはあれだ。」

人々は自分の命の救はれた事に氣がついた。思はず地面に土下座して、五兵衛の前で涙にむせんだ。老人も少し泣いた、嬉しさから、そして無理をした身體の苦しきから。でもそのまゝでは居なかつた。

「さあ、おれの家は村の家だ。お寺もある。皆しつかりしろ。」

彼は先にたつて案内した。人々はたゞ叫んだり、鬨の聲を擧げたりした。

それから村の困難は随分續いた。しかし村は追々に恢復した。それには老人の努力も大きかつた。

村が再び建て直された時、人々は五兵衛に對する自分の負債を忘れなかつたが、その偉大な慈悲の魂に對しては、何とも酬いる事が出来なかつた。彼等は、五兵衛の魂は全く神の如きものであると思つた。そこで其の御魂のために、一つの社を建てて、鳥居の上には金字で「五兵衛大明神」の額をかけた。村中は少しも其の尊さを疑ふことなく、この神の前に祈と供物とを捧げた。

それについて老人はどう感じたか。それは私は知らない。只私の知つて居るのは、下の村で彼が神として祀られて居る時、彼は山の上の古い草葺屋根の中で子供や孫たちと一緒に、前の通り人間らしく質素に住んで居たことである。

もう彼が死んでから百年以上になるが、神社はやはり存在してゐて、村人の祈は、この善良な老人の御魂に向つて、今も捧げられてゐるといふことである。(小泉八雲「神による」)

一七 師走日記

十二月一日。水曜。朝晴れて寒し。父上お胴着召す。えらがりの眞ちゃんも、今日は流石に足袋穿く。學校よりすぐに琴のお稽古にまはる。「葵の上」あがる。歸る頃風吹きだし、だんくひどくなりて、暮るゝまで止まず。夜、上野の鐘牙えて聞ゆ。

二日。木曜。飛石に薄霜おき、南天の枝に見も知らぬ小鳥

小泉八雲
アイルランド
生れの英人、
ラフカディオ・
ハインズ、
家。明治三十
七年、五月十
五歳

書取のこと

葵の上
箏曲の名

るたり。冬牡丹一つ咲く。西澤さんに拜借の「北極奇聞」を返す。夕焼の空に、七八日ぶりの富士山鮮かに見ゆ、風呂場よりも、二階よりも。



三日。金曜。風寒し。手水鉢に薄き氷見ゆ。けふ始めて襟卷す。兄様に肘突頼まる。母上に端切を貰ひて、序に自分も一つ縫ふ。眞ちゃん少し風引く。わざと髪を刈り来て、もうなほつた、もうなほつた、と言ひ言ひ、一人にてなほりしにしてしまひぬ。朝、曇を氣遣ひながら學校へ行く。二時間目

に風、三時間目より雨。

神戸の姉様より、小包にて御歳暮届く。何時になく早し。返事母上に代りて書く。

小包只今折柄の雨の中に到着致候。風は寒けれども、御心入れの暖かなる御祝物、誠に嬉しく存候。御主人へよろしく。此方よりは又改めて。匆々。

うっかりと我が名を書きて、出したる後にて氣がつきたり、御主人へよろしく。は、どう考へても可笑し。雨、風を帯びて、日暮る、事あわたし。

五日。日曜。曇。母上春着の見つもりし給ふ。お手傳して、洗物・張物などの部わけをなす。疊屋に催促の使を出す。

午後、文庫の中を片付く。大抵は反古なり。役に立ちさうなる物はほんの少しばかり。何となく心細し。

六日。月曜。冷々と空晴れたり。霜柱立つ。父上のお書齋に石油ストーブ据ゑつく。夕方微震。

七日。火曜。曇がへ。空風カラカゼめきて、日かけ照り曇る。夜、父上の靴足袋編む。

八日。水曜。晴れて暖かなり。髪洗ふ。庭松のこずゑに、何處の兒の凧か引つかゝりて、夕近くまで離れず。兄様やつとの思ひして取らる。町田の叔父様より、御旅行にお立ちの由、葉書來る。冬牡丹また一つ咲きたり。

九日。木曜。晴。曇がへ終る。大工來て、あちらこちら繕

ふ。母上と買物に三越に行き、序に新曆を買ひて歸る。兄様と眞ちゃんと、裏庭にて落葉を焼く。煙おもしろく立ちのぼる。

十日。金曜。今日も晴。學校より歸りて、洗物少しす。杉垣の向ふに、隣の山茶花の花白く見えて、落水の音いと靜しずかなり。

母上重詰お雑煮などの獻立し、帳面に書きつけ給ふ。「口取には是非梅花玉子を。」と差出口して、ためしに今日料理して見る。白身が梅の花瓣、黄身が心。少し大き過ぎ柔か過ぎたれど、見る目兎に角美しとて、母上に褒めらる。「お蔭で夕飯が遅くなつた。」と、兄様例の憎まれ口に、却つて誰より多く

可
じ
献
立

召上る。

十一日。土曜。朝霜日に輝きて白し。うがひの水いつもより齒にしむ。少し後れて琴のお稽古に行く。先生もお

風氣なり。夜、犬頻りに吠えておそろし。遠き半鐘聞ゆ。

十二日。日曜。寒けれど晴、心地よし。深井さんにお能見にさそはれたるを斷り、家にゐて、色々母上の御用を足す。

父上にお客多く、目の廻るやうにて夜になりぬ。

十三日。月曜。曇。雨少し降る。町田の叔父様、昨日御歸京の由にて、お出でになる。お土産に米澤紬一反戴く。

十四日。火曜。晴れたる空に風高く吹きて、後れ渡る雁が音聞ゆ。母上お歳暮、お年玉の配りあてし給ふ。側にゐて、

品數、家數など、おつしやる通りを勝手用の手帳に書きつく。

カメリヤの蕾、今日やつと破れかけたり。植鐵より梅の盆

栽届く。下駄、手袋買ふ。來年の日記帳も買ふ。

十五日。水曜。晴。冬牡丹の花五つになりぬ。學校の歸

りに、中川さんのお家に寄り、可愛い兎の子を見、少し後れて花のお稽古に行く。

夜、齒すこし痛む。母上に揉んでいたゞき、早く休む。風す

さまじく吹出でたり。電線の響耳につきて落着かれず。

(服部躬治—姉妹)

服部躬治
國文に堪能な
人。此の文は
少女の日記に
も擬して書いた

一八 詩二篇

一 粉雪の日

粉雪の日の淋——さよ

どこの花屋をたづねても

花屋の店はかりぐした

涙ぐも——くたぐひとり

歩めば知らぬ裏街で

めくらの母をおぶひゆく

やさしい人に逢ひま——た

たづねた薔薇は毎けれども

それにもま——て美しい

心の花の咲くを見た

粉雪の日のうれ——さよ

二 クリスマスの夜にうたへる

貧しき児の歌

雪はふるふる

夜の街を

サンタ、クロスの

ーーろかけ
 わが家の門をかど
 通り過ぎ
 いくの兒をば
 訪ふなりむ
 路のあかりに
 すかー見る
 背の囊の
 まろやかに

西條八十
 詩人、早稻田
 大學講師

われには遠き
 幸福の
 そのすがたにも
 似たるかな
 雪はふるふる
 冬の夜の
 夢よりさめー
 わがうれひ

(西條八十ー赤き獵衣)

先生 中島歌子。水戸藩御用宿。中島又左衛門の女。歌人。門の女。明大。學日。十六年。致。治。三。十。六。年。六。十。三。

一九 恩師の臨終

病院でも、先生をよほど御重體さうに取扱つてゐる。なにしろ専門の人々の目色が容易ならぬので、胸が轟く。それと聞いて、お枕許に集るお弟子達が多く、病院の電話は専用のやうに、絶間なしに貴顯方から御容體を聞かれる。某の宮々様の御使、殊に梨本宮様は、御幼少から御教授を受けさせられた先生の事ゆゑ、御心配も一方でない。鍋島侯爵夫人、前田後室、同侯爵夫人、何れもお弟子の中の御親しいお弟子であるから、お見舞もなほざりでない。もはやと云ふ時に、鍋島侯爵夫人が、お姫様をお二方おつれになつて、御病室

でお泣きになつた面影は、どうしても忘れ難い思出である。大勢のお弟子を枕邊において、先生は明日知れぬ御身を、豊かに横たへてお出でになる。

「なんですね、そんな難かしい顔をしないで、賑やかにしていらつしやい。

やうやくに極樂園は近づきぬ

いざ月花を飽くまでも見ん

どうも耳が鳴つてね。よくお聲が聞えませんが。とんと松でも伐るやうに鳴ります。

昨日今日耳なし山に入りしより

松伐る音のかしましきかな

耳なし山 大和國にある。三山の一

と、朗らかにお詠じになつて、にこ／＼としてお出でになる。それでも御苦痛は、息切の忙しいのに、さぞかしとお痛はしい。夜遅くまで、何かとお見舞の人達のお相手などしてゐると、さあ／＼、早くお歸り遊ばせ。赤ちやんが可愛想ですから、お母様が御心配遊ばすでせう。と、御自分の御苦痛は知らないやうに、いろ／＼と御心配をして下さる。涙を呑んで御挨拶を申しあげると、明日は早く来て頂戴よ。今夜は大丈夫ですが、ら。とおつしやる。

二十九日
明治三十六年
十二月

斯様にして、四五日御看護申しあげてゐると、二十九日の朝は、私の顔をぢつと見ていらつしやつたが、目に涙をお浮めになつて、今日は歸つてはいけませんよ。とおつしやる。い

つも夕暮になると、はやく歸れ歸れ。と、追立てる様におつしやるのにと、思ふと、不安の念に襲はれて、心弱い涙がとめどもなく出る。

御良人様
舊水戸藩士林
忠左衛門。武
田耕雲齋の事
に關して戦死
した人

御遺言も立派に其の日に遊ばす。御良人様の勤王のお志をお助けになつた事や何か、天聽に達して居るから、此の實際位記を下し賜ふやうな御内聞も承つた。刻々に何となく迫り来るものがある様に遠しくなる。諸家のお見舞品が山の様にある。五間ばかり續けて借用した病室には、御大切の報で馳集つたお弟子達、皆立派な方々で、大勢居並んでお出でになりながら、咳一つ聞えぬ。御遺稿は私に取集めよとおつしやつて、兩手を伸ばしてお抱きになつた。何

か其の他にも御申置がある。承る身の悲しさは御返辭も出来かねるのを、同じくにくくとしてお出でになる。病院の大勢のお醫者達や、幾十人と云ふお弟子に圍繞されて、私の手を右手にお握りになりながら、安々とお眠りになる。並居るお弟子達は、それと見るよりお體に取縋つて、聲をかぎりに泣惑ふ。「噫、どうしても仕方がない。」と、一同顔を見合せて、更に涙にくれた時は、夜が明離れる頃であつた。先生は相變らず美しく、にくく、と何の御苦痛もなささうに見える。「あまり明離れぬ中に。」と注意されて、また釣臺でお宅へお送り申す。二十五日に御入院の時と同じ道を、今はさも心おきないと云ふやうに、早足に行く人夫の足取が氣遣

はしく、揺れはしまいか、お苦しくはあるまいかと、泣きながら、唯そんな事を思つてゐた。 (三宅花園―その日その日)

三宅花園
名は龍子。
學博士三宅
次郎氏の妻
文雄

二〇 お早う

長い一生を無病息災に暮さうとするには、短い一日を無病息災に暮す方法を立てねばならぬ。さうして一日の運命は、毎朝床を出る時の心持次第でさまるものである。

されば床を離れる時、さあ、是が自分の立身出世の首途である。と觀念して、旭日昇天のやうな精神で、勢よく床を出なければならぬ。かうして床を出て、人に出逢つたら、家族は云ふまでもなく、朋輩であらうが、或は下女、下男であらうが、ま

づ自分から極めて晴やかな愉快な感情を相手に與へることが肝要である。下女や下男に向つて、自分から先に挨拶をするのは、不見識であると云ふやうな卑劣な根性ではないかぬ。自分から先に聲を掛ければ、先方は機嫌よく、にこにこ挨拶するにきまつてゐる。もし今更事新しく「お早う」と挨拶するのは、きまりが悪いと思つたら、其の前夜に挨拶の豫告をして置くがよい。さうして翌朝に「こゝと、お早う」と挨拶すれば、皆が噴きだして笑ふに違ひない。かうなると、早朝から陽氣が家一杯に溢れる譯で、其の影響は、自分にも他人にも將又事業の上にも、どれだけの利益を及ぼすか知れない。早朝からぶつ／＼小言を並べたり、澁

面を作つたりする様では、其の人の其の日の吉凶は、略、判断する事が出来る。これを相撲に譬へると、所謂立合負であつて、取組みぬ前から、既に勝負がわかつてゐるのである。英國の諺に、快活の心は終まで行くが、悲哀の心は一哩で疲れる。といふのがある。誠に名言であつて、不元氣な根性では、とても物事が甘く行きさうな筈がない。朝から氣の晴やかな人であつて、始めて事業に成功するのである。道元禪師は、人は喜心老心大心の三心を心掛けねばならぬ。といはれた。喜心とは云ふまでもなく晴やかな快活な心で、老心とは俗に云ふまめやかな心である。大心とは、海闊從魚躍、天空任鳥飛とある、所謂海闊天空の氣象で、また、振衣

道元禪師
越前永平寺の
開山、久我忠
通の子。賜號
承陽大師。賜號
（六〇一九三）
海闊從魚躍
云々
古今詩話に在
る句
振衣千仞岡
云々
左思の詩句、
文選にある

前田利家
加賀國金澤藩
の祖。三十一
三五九

千仞岡、灌足、萬里流」といふやうな心事である。また名將言
行録に、前田利家公が、人は常に富士山を見るやうな心持で
ありたいものだ」と申されたとあるが、是もまた大心の態度
を表白したもので、八面玲瓏として東海の天に懸る富士山
の光景を見ては、何人も其の心が、自ら莊嚴雄大とならずに
は居られまい。

要するに人は、毎朝必ず快活な心で床を出て、上に述べた三
心を以て終日其の業の爲に活動したならば、心は常に穩健
和平で、能く周圍の欽慕と推重とを受け、百事意の如くなら
ぬ事はなからう。

(坪野平太郎)

坪野平太郎
前東京高等商
業學校長

二一 硝子障子

去年の正月と今年の正月と、自分に格別違つた事もないが、
少し違つたのは、からだか餘計に弱つたと思ふ事と、年賀の
はがきが意外に澤山來た事と、病室の南側を硝子障子にし
た事ぐらゐである。硝子障子にしたのは、寒氣を防ぐ爲が
第一で、第二には居ながら外の景色を見る爲であつた。
果して暖い、果して見える。見えるも見えるも、庭の松の木
も見える、杉垣も見える、物干竿も見える、物干竿に足袋のふ
らさげてあるのも見える。その下の枯菊、水仙、小松菜の二
葉に霜のおいてゐるのも見える。庭に出してある鳥籠も
見える、籠の鳥が餌を食ふのも見える。雀が松の木をあち

上野
東京下谷區に
ある丘、上野
公園

らこちらするのも見える、鴉が四五羽連立つて枯木へ來たと思ふと、すぐに又はらくと飛んでしまふのも見える。鶯が一羽、黙つて屋根をあさりながら、ふいふと飛廻るのも見える。向ふの屋根も見える、上野の森も見える、凍つたやうな雲も見える、鶯の舞つてゐるのも見える、四角な紙鳶と奴紙鳶と二つ揚つてゐるのも見える。四角な紙鳶がめんくらつて屋根の上に落ちたのも見える、それを下から引張るので、紙鳶が鬼瓦にかゝつてうなづいて居るのも見える。殊に雪の景色は今年つくづくと見た。山吹の枝に雪の積んだのが面白いといふ事も、今年知つた。併しこれらは硝子障子について略豫想した事であつたが、

正岡子規
名は常規。俳
人。明治三十
五年歿。三十
六歳

その外に豫想しない第三の利益があつた。それは日光を浴びる事である。眞晝近き冬の日が、六疊の奥までさしこむので、その中に寝てゐるのが暖いばかりでなく、非常に愉快になつて、終には起きて坐つて見るやうになる。この時は病氣といふ感じが全く消えてしまふ。枕もとを見ると、寒暖計は七十度近くまで上つて、福壽草の蕾は一點の黄をあらはして來た。

〔正岡子規—子規小品文集〕

二二 子供の時の家

私の舊宅は、今私の住んでゐる處から四五町奥の、馬場下といふ町にあつた。町とは云ひながら、その實小さな宿場と

高田の馬場
武藏國北豊島
郡東京市の
郊外

堀部安兵衛
赤穂四十七士
の一人。元祿
の初、寺田藤
十郎を助けて
その仇を討た
せた

しか思はれぬ位、子供の時の私には寂れ切つて淋しく見え
た。もとく馬場下とは高田の馬場の下にあるといふ意
味なのだから、江戸繪圖で見ても、朱引内か朱引外か分らな
い邊鄙な隅の方にあつたに違ひない。それでも藏造の家が、狭い町内に三四軒はあつたらう。坂
を上ると右側に見える、近江屋傳兵衛といふ藥種屋などは
その一つであつた。それから坂を下り切つた所に、間口の
廣い小倉屋といふ酒屋もあつた。尤もこの方は藏造では
無かつたけれども、堀部安兵衛が高田の馬場で敵を討つ時
に、此處へ立ちよつて、榊酒を飲んで行つたといふ履歴のあ
る家柄であつた。私はその話を子供の時分から覚えて居

たが、つひぞ其處にしまつてあるといふ噂の、安兵衛が口を
着けた榊を見たことが無かつた。その代り、其處の娘さん
の長唄は、何度となく聞いた。私は子供だから、上手だか下
手だか丸で解らなかつたけれども、私の宅の玄關から表へ
出る敷石の上に立つて、通へでも行かうとすると、その聲が
其處からよく聞えたのである。春の日の晝過ぎなどに、私
はよくうつとりとした魂をうらゝかな光に包みながら、長
唄のおさらびを聴くでも無く、聴かぬでも無く、ぼんやり私
の家の土藏の白壁に身をもたらせて、佇ずんで居たことが
ある。そのお蔭で私はたうとう、旅の衣は篠懸のなどとい
ふ文句を何時の間にか覚えてしまつた。

やつちや場
問屋でせり賣
をするところ

この外に棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋も一軒あつた。少し八幡坂の方へ寄つた所には、廣い土間を屋根の下へ抱へ込んだやつちや場があつた。私の家のものは、其處の主人を問屋の仙太郎さんと呼んで居た。仙太郎さんは、何でも私の父と極遠い親類つゞきになつてゐるんだとか聞いたが、交際からいふとまるで疎濶であつた。往來で行きあふ時だけ、好い御天氣でなどと、聲を掛ける位の間柄に過ぎなかつたらしく思はれる。子供の私には、その仙太郎さんが高い臺の上に腰を掛けて、矢立と帳面を持つたまゝ「いやつちや幾ら」と威勢の好い聲で、下に居る大勢の顔を見渡す光景が餘程面白かつた。下からは又二十本も三十

短歌
長歌
俗謡
瑞唄

本もの手を一度に舉げて、みんな仙太郎さんの方を向きながら「ろんじ」たのがれんたのといふ符牒を、罵るやうに呼上げるうちに、薑や茄子や唐茄子の籠が、夫等の節太の手で、どしどし何處かへ運びさられるのも勇ましかつた。3
どんな田舎へ行つても有りがちなのは豆腐屋だ。こゝの豆腐屋には、油の臭の染みこんだ縄暖簾がかゝつてゐて、門口を流れる下水の水が、京都へでも行つたやうに綺麗だつた。その豆腐屋について廻ると、半町程先に西閑寺といふ寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後は、深い竹藪で一面に被はれてゐるので、中にどんなものがあるか、通からは全く見えなかつたが、其の奥でする朝晩のお勤の鉦の

音は、今でも私の耳に残つてゐる。ことに霧の深い秋から木枯の吹く冬へかけて、かん／＼鳴る西閑寺の鉦の音は、何時でも私の心に、悲しくて冷たい或物を叩き込むやうに、小さい私の氣分を寒くした。⁴

當時私の家から、まづ町らしい町へ出ようとするには、どうしても人家の無い茶畠とか、竹藪とか、又は長い田圃路とかを通り抜けなければならなかつた。買物らしい買物には大抵神樂坂まで出る例になつてゐたので、さうした必要に馴らされた私に、さしたる苦痛のある筈も無かつたが、それでも寺町へ出ようとする、あの五六町の一筋道などになると、晝でも森として、大空が曇つたやうに始終薄暗かつた。

神樂坂
東京市牛込區

寺町
牛込區の町名

あの土手の上に二抱も三抱もあらうといふ大木が、何本となく並んで、その隙間々々をまた大きな竹藪で塞いで居たのだから、日の目を拜む時間といつたら、一日の中恐らくただの一刻も無かつたらう。下町へ行かうと思つて、日和下駄などを穿いて出ようものなら、屹度ひどい目にあふに極つてゐた。あすこの霜だけは雨よりも雪よりも怖しいもののやうに、私の頭にしみこんで居る。⁵その位不便な所でも、火事のおそれはあつたものと見えて、やはり町の曲角に高い梯子が立つてゐた。さうして其上に古い半鐘も型の如く釣してあつた。私はかうした有りのまゝの昔をよく思ひ出す。その半鐘のすぐ下にあつ

た一膳飯屋も、おのづと眼先に浮んで来る。繩暖簾の隙間から、あたゝかさうな煮しめの香が煙と共に往來へ流れ出して、それが夕靄の中に解けこんで行く趣なども忘れる事が出来ない。私が子規のまだ生きてゐるうちに、

半鐘と並んで高き冬木哉

といふ句を作つたのは、實はこの半鐘の記念のためであつた。

(夏目漱石―硝子戸の中)

二三 寒中見舞

前文
小寒と申候ほどは、さほどにもおぼえず候ひしが、さすがに大寒に入りし朝よりは、硯の水も凍り、寒さしみくくと身を

刺すやうに思はれ候。御許御一統様、お變りもあらせられず候や。さて此の煖爐、專賣特許とかにて、或人のもとより、二三個譲りうけて試み申候處、よほど効能あるやうに覺え候まゝ、寒中御見舞として、一個進上仕候。木炭をよきほどにお差入れなされ、直ちに蓋遊ばして御座敷の隅などに打置かせられ候はゞ、二三分の中に、室内春のやうなる心地致し申すべく候。手前がた老人などは、一度用ひ候ひしより、片時もそば去らず、此の寒中はさむさ知らずにごすべしなど、申し居り候ことに御座候。これより差上げ候品を、かく褒めはやし申すこと、いかゞはしく候へども、決して妄りなることは申しあげざるつもりに候へば、御試みあそば

さるべく候。まづは御見舞かたぐ、一筆申しあげ参らせ候。かしこ。

右 返事

寒さに困じて、ひさしく御無音申しあげ居り候處、今日は思ひがけなく御消息たまはり、うれしく拜見仕候。いづれもさま御さはりもいらせられず候こと、まづ、御めでたく存候。さて御惠み下され候煖爐、いかにも見事なるものにて、一同打寄り取りはやし居り候。それについては、御こまごまと、使用法さへ御書添へたまはり候かたじけなさ、早速用意仕るべく候。老人はじめ一同より、厚く御禮申上候やう申候。この猪肉、少しばかりに候へども、日光の方より、只

池邊義象
國學者。宮内
省御歌所寄人
大正十一年歿

今貫ひあはせ候につき、ほんの御うつりに差上げ申候。何とぞ御臺所の御用に御加へ下されたく願上候。いづれ其のうち参上、いろく、申しあぐべく、取りあへず御受のみ、此の如くに御座候。あなかしこ。
(池邊義象)

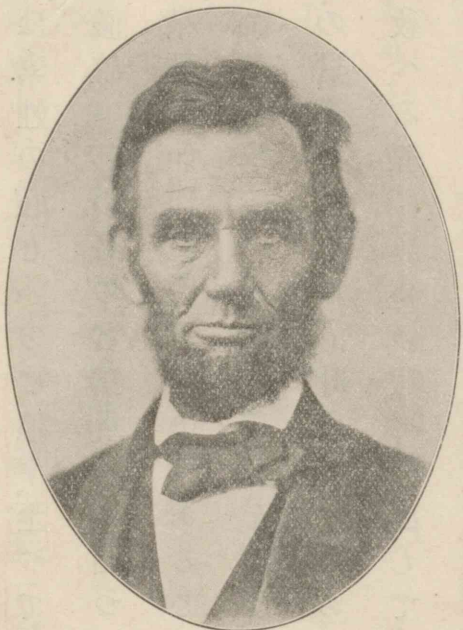
二四 リンカーンの少年時代 その一

完全無缺の人物は、古往今來決してありません。併し完全に近い人物を求めたならば、アブラハム、リンカーンの如きは、實に其の一人でありませう。英雄豪傑は必ずしも得難くはありませんが、完全に近い人物は眞に稀有なものです。

リンカーンは、北米合衆國第十六代の大統領であります。智あり、勇あり、義あり、愛あり、其の徳は萬世に輝き、其の澤は四海に溢れた人であります。私は今此の大人物の少年時代の話をして、聊か追慕の意を表したいと思ひます。かゝる大人物も、その生れは極めて賤しく、生れた處さへ、唯ケンタッキー州中、當時ハルデインと稱へた片田舎の、ノーリン河の邊と云ふだけで、今日は遺跡とても残つてゐませぬ。彼の兩親は極めて貧しく、家と稱する程の住居もなく、丸木の小屋に住んで居りました。この丸木小屋こそ、實に千古の大人物アブラハム、リンカーンが、呱呱の聲を擧げた處であります。時は西曆一千八百九年二月十二日、春雪正

に融けて、一陽來復する時節の事であります。

父は貧しい日雇で、日々他人の田圃に勞役し、母は炊事、裁縫



リンカーン

一切の家事を務める外に、他家へ洗濯に雇はれたり、近傍の森や林で薪を拾つたりして、其の日其の日のかすかな煙を立てて居りました。リンカーンは七歳の時から、父に随つて森に行つては、小さい腕で小さい斧を揮つて、開墾の業を助け、畠へ出ては、鋤を執つて耕作の手助をもして、十年あまり寸毫の

暇もなく、營々として労働を続けました。

かゝる貧苦の間にも、常に彼を教へ彼を勵まして、他日大成すべき基を作つたのは、彼の母親でありました。この母親は素姓の賤しいのに似ず、至つて賢明な婦人で、常に人間の價値は其の身の貧富貴賤に因つて定まるものでなく、其の精神の如何に因るものであることを教へました。そして、御身を學校に入れて、學問をさせたいのは山々であるが、今の貧乏ではそれも叶はぬ。せめては母が覺えた一通りを教へる程に、農事の暇に精出して勉強せよ。と懇ろに言聞かせて、第一に習字、次に讀方を教へ、朝は早く起しては習はせ、夜は疲勞を忍ばせては教へましたが、不幸にもリンカーン

が十歳の時、此の世を去つてしまひました。

父はもとより日々の勞役に追はれて、其の子を顧みる暇はありません。母亡き後のリンカーンは、暗夜に燈火を失つた心地。「せめて一年半年なりとも、小學校に通ひたい。」と、切に父に訴へましたので、父も餘りの不憫さに、遂に之を許しました。リンカーンは天にも昇る心地で、日々九哩餘の路をも厭はず、一回の缺席をもしないで、田舎の一小學校に通ひましたが、哀れにも赤貧の爲に、僅々九個月で、また廢學せねばならぬ事になりました。あゝ、此の九個月こそ、彼が前にも後にも、一生涯中に受けた學校教育の全體であります。これから彼はまた日々鋤を執つて、田圃に働く身となりま

したが、或は種を播き、或は草を刈る時にも、常に書物を携へてゐました。その書物は綴字書・算術書・文法書の三種でありました。彼の性質の伶俐なる、又その精神の不屈なる、耕作の暇々に露天の下で、教師もなく、能く其の意義を理解する事が出来たのであります。かくて朝にはこれらの書を携へて出で、夕には之を携へて歸り、暇ある毎に怠らなかつたから、久しからぬ中に、この三書を一章一句も残さず、悉く暗記するに至りました。

二五 リンカーンの少年時代 その二

十三四歳の頃、その隣に、かねて其の名を聞いて、其の功業を

ウォシントン

北米合衆國の
初代大統領、
國祖と稱せら
れる
(1732—1799)

敬慕せるジョージ・ウォシントンの傳記を藏することを知り、讀みたいとは思ひながら、賤しい身分を恥ぢて、思をこがして居ましたが、一日、遂に思ひ切つて、其の借覽を請ひました。幸に其の人は快く貸してくれました。リンカーンは鬼の首でも取つた心地で、雀躍して家にかへり、丁寧に戸棚の中に入れて置きましたが、不幸にも其の夜大風雨があつて、彼の爲に一大事が起りました。彼が驚き覺めて、借りた本のことを思ひ出し、濡しては一大事と、急ぎ取出して見た時は、もう後の祭。壁の隙間から吹込んだ雨に濡れて、さんざんになつて居ますので、大聲あげて泣きました。子供心にも心配して、其の夜は終夜眠れません。翌朝、兎や角と案

じましたが、正直に事實を述べて罪を謝する外はないと決心して、濡破れてページも分らなくなつた書物を持つて隣家に行き、泣いて詫をし、その代りに、二日でも三日でも、勞役をさせて下さい。」と頼みましたので、貸主も其の心を察して、別段に之を尤めず、其の意に任せました。そこで彼はウォシントン傳を携へて家に歸り、濡れたページを丁寧に乾かして、晝夜の別なく耽讀し、以來讀過數十遍、この大人物の品性に感化せられて、遂には之を體得するに至りました。又彼が一農家の僕となつて居た頃、或日一人の旅客が、其の家に泊つたことがあります。其の客が深更に厠に行つて、ふと見ると、庭の木立を洩れて燈火の光がさしてゐます。

不思議なことと、竊かに行つて見れば、思ひがけなくも、裏の粗末な長屋に、一人の少年が一心不亂に書見をして居ります。旅客は此の意外の光景にひどく驚いたが、其の夜は其のまゝ我が室に引返し、翌朝宿の主人に此の事を尋ねました。所が、主人も、彼は感心な少年で、晝間は畑に出て、寸暇を得れば書を読み、夜も夜業が終れば、更けるまで勉強し、わからぬ事があれば人に質し、學問を此の上ない樂みとしてゐる。しかも温順で謙遜で、正直に能く働いて、才智もあれば情愛もあつて、實に末頼もしい少年である。」と答へたといふことであります。此の少年こそ、言ふまでもなくリンカーン其の人でありました。

皆さんは、我が國近世の偉人二宮尊徳の少年時代の勉學を知つて居られませう。貧家に育つても、能く勉強の功を積んで大成した、東西の二大人物の少年時代は、實に私共の模範とすべきものであります。艱難汝を玉にす、リンカーンが他日大統領となり、世界の大人物として、萬人に仰がれるに至つたのも、實に此の少年時代に於て、貧窮の經驗から得た教訓の賜であると思はれます。

(「アブラハム、リンカーン」に據る)

二六 曲り角に立つて

廣い平かな道を眞直にあるいてゐる時には、危険もなければ

ば苦痛を感じることありません。しかし、行けども行けども平かなばかりで、何の變化もなく、何の目標とすべきものも見出されない時、ふと立止つて、これが果して自己の行くべき道であらうかと、疑惑を感じることがあります。また今まで廣く平かであつた道が、急に狭く峻しくなつたり、兩側に見慣れぬ草花が咲亂れてゐたりすると、暫し佇んで、前後左右を見まはす氣になりはしないでせうか。或はまた、今まで一直線に續いてゐた道が、意外な所で脇に折れ曲つてゐるのを見ると、その曲り角に佇んで、行手を思ひ煩ふと共に、來た道を振返つて見ることに、あたりはしないでせうか。さうして佇んで居る時、耳元で誰ともなく、

「お前はあの平な道があるいて居たのだ。けれどもこの
曲り角を曲ると、もうそんな廣い道ではない。ぬかるみ
もある、嶮しい崖の下も通る。今までの呑氣な足どりで
は歩けない。氣を付けなければ……」
と教へてくれるやうな氣がします。さうさ、やくのは誰
でせう。誰でも無い、自分自身の心の聲です。この聲を聞
いた人は、もう一度前後左右を見まはして、行くべき道か、ど
うかといふことを考へずには居ないでせう。そしてまた、
この聲を聞くために、時々佇んで耳を澄まさなければなら
ないことに氣が付くと思ひます。
何處までも進んでやまない若い人達が、徒らに立止つて過

去を顧みたり、左右のものに氣をとられるといふことは、勿
論望ましい事で無いかも知れませんが。私達は常に、前へ、前
へ。」と進んで、新しい道を切りひらかなければならないので
す。さう努めることが、新しい運命を開く途です。けれど
も、今進んでゐる道が、果して正しい道であるかどうか、過去
と比べて、これからどんなに、努力する必要もあり、價値もあ
る働であるか否かを知るため、せめて曲り角に立つ時だけ
でも、心を靜めて、靜かに四邊を振返つて見たいと思ひます。
それは休息のためではない、過去を懷しむがためでもない、
これから行く新しい道で、躓き倒れぬがためにかつ又更に
不退轉の勇猛心を奮ひ起すがために、さうしたのであり

沼田笠峰
著作家、教育
家

ます。

(沼田笠峰) 若き婦人の行くべき道

大事業
二七 奥村五百子

刀自
奥村五百子を
指す

明治三十七年八月、刀自は出征軍隊慰問の爲に、愛國婦人會を代表して、滿韓地方へ向ふ事となつた。其の目的は、第一、戦地の將卒に對して、日本の婦人一同が、如何に感謝の意を表してゐるかを直接に傳へ、第二、五十餘萬の會員が如何に活動してゐるかを傳へ、第三、軍人の勇氣を鼓舞し、第四、日本の母なり妻なりを代表して戦死者の墓を弔ふといふのであつた。刀自が戦地へ出張するのは、是が三度目である。病身ではあり、老體ではあり、殊に炎熱燬くが如き時、いかに

元氣な人とはいへ、天涯萬里の波濤を越え、硝烟彈雨の間を潜つて、傷病兵の慰藉、戦死者の追弔、各軍隊の慰問などいふ困難な事業に當るのは、内心甚だ辛く思つたに相違ない。



奥村五百子

けれども刀自の一身は、此の大事業をなし遂げるに就いて、鐵石と鍛へてあつた。自ら進んで困難を踏まなければ、到底多數會員を覺醒し指導することは出來ないと信じて、奮つて難局に當つたのである。刀自當時の心中を推察すると、其の至誠至烈、男子にも容易に見られない勇壯の氣に打たれるのである。一行

の服装は、カーキ色筒袖の單衣に、同色の袴を着け、ナボレオン型カーキ色の帽を被り、長靴を穿き、カーキ色の雨衣を着ることとした。これは總べて刀自の創案になつたのであつた。

前二回の戦地視察は、一個人若しくは本願寺連枝の隨行と云ふに過ぎなかつたが、今度は聊か趣が違つて、愛國婦人會の首唱者として、その會員全體を代表する慰問使として、堂と派遣されるのであるから、東京出發の際は、岩倉會長を始め、理事島津公夫人、近衛公母堂、谷子夫人、監事九條公夫人、評議員佐々木伯夫人以下、花の如き貴婦人が、八十餘名も見送に出られた。刀自が車窓から國旗を出して振ると、一同

岩倉會長
公爵岩倉具定
の夫人久子

は優しい聲を張上げて萬歳を連呼した。

「品川をお通りなさる時は、奥村さん、窓から首を出して下さいよ。」と、誰やらが遽しく傳へた。依つて刀自は品川に着くと共に、車窓から首を突出し、そして例の國旗を振つた。するとプラットホームには、毛利公母堂が見送に來てお出でになる。毛利家庭園の小高い處に旗を立て、そこに男女の一群が現はれて、盛に旗を振つてゐた。刀自も國旗を振つて應じた。双方から起る萬歳々々の聲が、庭内と停車場とに續いた。驛々には多くの見送人が群集して、一々名刺を出すので、忽ち名刺の山が築かれた。わけを知らぬ人々は、一行がカーキ色の服装をしてゐるので、女の聯隊が繰出

渡邊霞亭

大阪朝日新聞
記者別號を
ふ、碧瑠璃園とい

すのだ。」と、目をみはつた者もあつた。
刀自は停車場ごとに、三分間演説をやる事を忘れなかつた。
それは會員の熱誠を心から感謝する事と、簡単に將來の希
望を述べる事とであつた。
(渡邊霞亭—奥村五百子)

二八 春近し

一

久しぶりで今日は何と云ふ好い天氣だらう。昨日までは、
ともすると、また雪でも降りさうに氣づかはれたほどの寒
さと空模様だつたのに、今朝起きて見ると、天地は全く思ひ
がけないうらゝかさを呈して居た。

此の地
作者の郷里、
新潟縣糸魚川
町

起出るが早いか戸を明けて、晴れわたつた大空を仰いだ一
瞬の心持は、全く何とも云つて見ようのない快さであつた。
濃く澄んだ空を、眞白な翅をひろげて鷗の舞つてゐるのも、
不思議なほど美しく感じられた。
日本中でも、最も晴天の少い地方の一つに數へられてゐる
此の地、わけても三ヶ月ほどの間に、僅に四五日ぐらゐしか
青い空と日の光とを見ることの出来ない、陰鬱な永い冬を
もつ此の土地に住んでゐる私たちにとつては、かうして久
しぶりで、思ひがけなくうらゝかな大空を仰ぐことは、全く
不思議なほど大きな喜びであつた。「ありがたい。」時には
かうした叫びを心から發せずには居られぬことさへある

陽炎
霞
霧
雲
雨
水

のであつた。

二

朝食後、一わたり仕事を済ましてから、二人の子供を連れて濱へ出て見た。

海の上にも砂濱にも、春の光がうららかにさしてゐた。遠くの岬には、もう霞がかつてゐた。砂濱には、もう陽炎が燃えてゐた。紺碧に風いだ海には、舷に日光を受けた漁舟が、彼方此方に輝いてゐるやうに見えた。

廣い砂濱のたゞ中へ出ると、全身を照らす日光の暖さに、吹く風の冷たさも却つて快く感じられた。子供たちは子犬かなどのやうに、砂の上をころ／＼轉がつて喜んだ。

近くに幅三四間ほどの小さな川がある。廣い砂濱を穿つて、山の雪の解けた冷たい清い水を海へ注いでゐた。その川尻の渚には、二三十羽の鷗が集つてゐた。

波際近くまで行つて町の方をふりかへつて見ると、いつの間にか、もう冬圍フユガキのとられた家竝の上に、眞白な北日本アルプス連山が頭をのぞかしてゐるのが見られた。眞青な空の表に、くつきりと描き出された眞白な山脈の輪廓を望む時ぐらゐ、嚴かな自然美を感じることは少い。

子供たちの騒ぎ廻つてゐる間、私はたゞ一人小石原の上に腰をおろして、肅然とした氣持で、暫く其の雪の遠山に眺め入つた。私の背後では、ゆるやかな波の音が、絶間なく續い

てゐた。

三

船のりが永い間の航海を終へた後、久々で上陸して土を踏む時の氣持は、何とも云つて見ようのない快いものだと思ふことであるが、それと同じやうに雪國に住む者が、永い冬を送つて、久しぶりで地面を踏み得た時の快さは、やはり何とも云ひようのない嬉しいものである。一年のうち、大部分土を踏みなれてゐる百姓でさへ、かうした土を踏む快さを、十分味ふことが出来ると云ふことである。そして、久しぶりで踏む地面は、いかにも柔かな感じを與へるものである。それは、疊の上を歩くのなど、は異

相馬御風
名は昌治、越
後の人、文學
者

安宅
加賀國能美郡
にあつた。關
址は今明かて
ない

つた快い彈力のある柔かさである (相馬御風—砂上漫筆)

二九 安宅

時しも頃は春のはじめ、風まださむき北國路を、いたはしや義經は、兄頼朝の疑をうけ、奥州さして落ちて行く。主従わづかに十二人、辨慶を先達、山伏姿に身をやつし、日數ほど經て加賀の國、安宅の港に着きにけり。善いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特に關を設けて、山伏をきびしく取調ぶる由、如何にすべきぞ。辨、これはゆゑしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あるべし。

一期 (生涯)
建立 (おんぎ)
勸進 (おんぎ)

人々いやく、何程の事かあらん。たゞ打破つて御通りあるべし。」

辨「いやく、打破らんはやすけれども、大事の前の小事なれば、なるべくはおだやかなる手段を取りたし。」

義「然らば辨慶、ともかくも其の方の工夫に任せん。宜しく計らひくれよ。」

辨「畏つて候。先づ考へ出したることは、我等かく山伏に身を婁せども、包みがたきは我が君の御品格なり。畏れながら暫く強力に御身を婁され、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし。さなくば忽ちに見出だされ候はん。」

主とされ、東主従

義「げにく、これは尤の事なり。」
姿を婁し主従は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば、關の役人富樫左衛門、

富「やあく、山伏、關なるぞ、名をなのれ。」

とぞ、呼ばはりける。

辨「承つて候。これは奈良東大寺建立のために、北陸道を勸進する山伏にて候。」

富「それは殊勝の事なれども、山伏なるからは、此の關は通しがたし。」

辨「して、其のいはれは。」
富「さればなり。頼朝義經御不和により、義經殿には山伏

東大寺
奈良七大寺の
一、八宗兼學、
治承四年十二
月二十八日、
平重衡の爲に
焼かれた

と姿をかへて奥州へ落ち
らるゝ由故に新關を設け
て、山伏を堅く止むるなり。
一人も通しがたし。」

辨承つて候。しかし質山伏
をこそとゞめらるゝなら
め。まことの山伏をとゞ
めたまふ必要あらじ。」

富「あら、むづかし。論より證
據なり、まこと東大寺建立
の勸進ならば、勸進帳のあ



るべき筈ぞ。こゝにてそれを讀上げられよ。某これ
にて聽聞せん。」

辨「何と、勸進帳を讀め。」とや。心得申して候。」

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中より有合せの卷物一
つ取出し、勸進帳と名づけつゝ、即智を以て文を綴り、まこと
しやかに聲高々と、天も響けと讀上げけり。富樫つゝ、
聞きすまし、

富「最早疑晴れて候。御通り候へ。」

辨「かたじけなく候。」

げにや、紅は園生に植ゑてもまぎれなし。後に隨ふ強力を、
富樫目早く見咎めて、

富いや、暫く、其の強力は通し難しとゞまれ。」
と叫びぬ。すは、我が君を怪しむは、一期の浮沈と仰天し、皆
一同に立ちどまる。

辨慶騒がずそらとぼけ、

辨「やい、強力め、何とて早く通らぬぞ。」

富いや、それはこなたより止めたるなり。」

辨「そは又何故。」

富「あの強力が姿、義經殿に似たる故なり。」

辨「奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しか云はるゝ強力め
は、一生の名譽ならんが、さりとては腹立たしや。けふ
の中に能登境まで行かんと思へばこそ、強力やとひた

るに、僅かの笈を重げに負ひて、人々に後るればこそ、貴
人かとも怪しまるれ。憎さも憎し、いで、懲らしてくれ
ん。」

金剛杖をおつ取つて、さんぐに打擲す。これはと驚く人
人を、辨慶目にて制しとめ、尙も激しく打据うる。富樫やう
やく疑念をとき、

富「これは我等があやまりなり。其の強力には構ひなし、
疾くく。一同御通りあれ。」

言ふに人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらば、さらば。と
立ちあがり、關路をあとにしづくと、奥州さして下りけり。

坪内逍遙
名は雄藏。文
學博士

(坪内逍遙)

足利高經
尊氏の族(三)

瓜生保
越前の人、延元二年金が崎を授けようとして高師泰に敗られ、弟義鑑と共に戦死した(一五七)

杉山
越前國南條郡

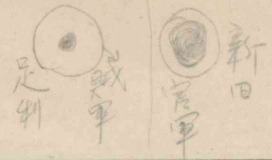
脇屋義助
勤王家、新田義貞の弟(一四〇〇)

義治
勤王家、其の最期は明かでない

東宮
恒良親王、後醍醐天皇の第六皇子(一三九一)

金が崎
越前國敦賀町の東北端

越前の府
府中と稱す、今の武生町

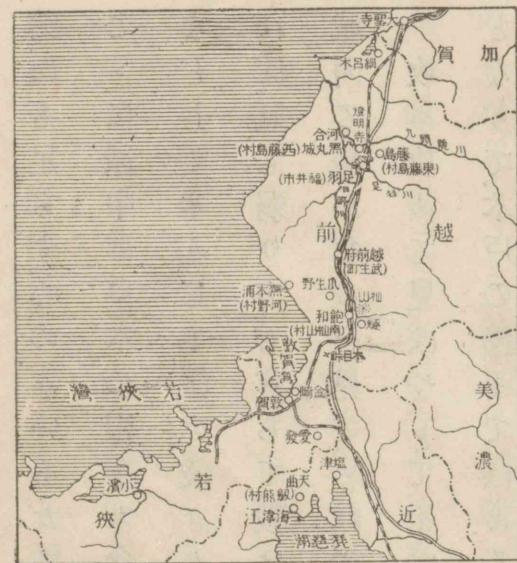


三〇 金が崎

越前の賊足利尾張守高經が手に、瓜生判官保、その弟兵庫助重彈正左衛門照義鑑房三人あり。杉山の城にありける時官軍に屬する心見えければ、脇屋義助、その子式部大輔義治を預けて、自ら敦賀に歸り、十六騎にて東宮を奉じて、義貞の籠りたる金が崎城に入りぬ。高經は月を越えて此の城を攻めければ、瓜生等にも、此處へ向へ。と令せしに、俄かに心變りして、義治を大將に押立て、飽和の社の前に、大中黒の旗を擧げてけり。かねて賊軍に不平なりし者ども、此處彼處より馳集りて、千餘騎になりぬ。高經大いに驚きて、まづこを討たばや。と言ふ。瓜生等敵兵を押靡けて、越前の府に出づ。

洞院實世
太政大臣公賢の子、越前に戦つた後、吉野に歸り、後、村上天皇に仕へ、從一位左大臣となる(一三〇八)

河島惟頼
越前の人、左近藏人と稱す



初の程は向ふ處勝たざるはなかりしが、敦賀に向ひ、金が崎の後攻せんとて出立ちし時、大勢にかゝり合ひて、瓜生兄弟激戦して討死しぬ。

是より先、金が崎には兵糧盡きて、唯瓜生が後攻をのみ命とせしが、果敢なく敗れぬと聞きて、悲しき事限りなし。

心こそ彌猛にはやれ、今は殆ど狙上の魚の如し。かくてあらば、徒らに餓死するより外なければ、義貞、義助、洞院實世等、河島惟頼を道しるべとして、夜、杉山へ落行きぬ。是急に

兵を催して、死に迫れる宿兵を救はんが爲なり。かゝるほどに寄手は愈加りて、十萬騎に餘り、義貞の兵は僅かに五百騎にも足らず、心のみいらだちて、空しく二十日を過しぬ。こゝに城中は草木の根をも食盡して、馬を殺し、鎧の皮を煮などして辛うじて飢を凌ぎしも、今は斷食十日にも餘りければ、氣も弱り力も落ちて、戦はん心もなし。寄手の兵ども城内の静かなるを見て、これ糧に盡きて弱りたるならん。一攻め攻めて見ばや。とて、えいや／＼と押寄す。城兵必死となりて、木戸の邊まではよろめき出でたれども、弓引かん力もなく、たゞ堀の蔭、岸の下に息づき居るのみ。賊は之を見て愈烈しく寄せく。城兵は劔を杖づきて立ちたるまゝ、

氣比大宮司
名は氏治、越前の人、氣比社の大宮司、此の役に尊良親王に殉死した。
 太郎
名は齊晴、氏治の長子
 義顯
新田義貞の長子(六〇一五七)
 尊良親王
後醍醐天皇第一の皇子、東宮の御兄(七二一九七)

討たる、ものあり、己が疵口の血を吸ひて渴を凌ぎ、死人の肉を食ひて一時の飢を救ふもあれど、大方弱り果てたる末なれば、見る／＼賊兵に刺殺さるゝもの數を知らず。今は敵已に二の木戸まで攻寄せたり、速かに東宮を遁しまつれ。と言ふ聲々に、氣比大宮司の太郎窃かに誘ひ奉り、小舟に乗せて遁しまつる。義顯、一の宮尊良親王の御前に跪き、あはれ、御運は盡き侍りぬ。我等弓矢の名を惜しむ家に侍れば、今自害仕るべし。御姿を見奉るもこれ限りにて侍り。と言ふ。宮はいつもよりも御心地よげなる御氣色にて、主上帝都へ還幸まします時、われ元首となり、汝を股肱とせよとこそ仰せ給ひつれ。股肱なくして、いかで元首のみあら

んや。我も命を白刃の上に縮めて、怨を黄泉の下に酬いぬべし。そもく、自害とは如何様にするものぞ。」と宣ふに、義顯落つる涙を鎧の袖に受けて、斯様にこそ候ものなれ。」と、やがて肌おしぬぎ、短刀逆手に取直して、左の脇に突立て、右の脇の肋骨二三枚かけて搔破り、其の刀を御前に差置きてうつぶしぬ。宮、我も後れじ。」とて、其の刀を取りて刺さんとし給ふに、柄口の血あまりてすべりければ、御衣の袖にて、其の柄をきりく」と押巻き、雪のやうなる御肌に、御胸の邊よりかけていたく突立て、義顯の死骸を枕に、其のまゝ、絶入り給ひき。之を見る人々我もく」と押重なりて切腹す。其の數三百餘人とぞ聞えし。

蕪木の浦
越前國南條郡
河野村に在
る。敦賀港の
直北十一里

延元二年
後醍醐天皇の
御代(一九七)
落合直文
國文學者。明
治三十六年
歿。四十三歳

氣比の太郎は東宮をば小舟に乗せまつり、海上三十餘町を遊ぎて、蕪木の浦に着きぬ。さて怪しげなる浦人の家に、東宮を預け置きまゐらせて、こは日本の國の主にならせ給ふべき人に渡らせ給ふぞ。如何にもして柚山城に入れまゐらせよ。」と申し含めて、己は再び金が崎城に歸り入りて自害しけり。時に延元二年六月の末つ方。城陥りて、北國の賊勢いよく、募りぬ。
(落合直文―新撰日本外史)

三一 地方へ移轉した友へ

月日のたつのは早いもので、御別れしてから、もう二年餘になりました。皆様御障もありませんか。御伺ひ申上げま

す。
あなた様がこゝに御出での頃と比べますと、近所の模様がすつかり變りました。あの頃は、細い道を人や車や馬がこみあつて通るといふ有様でございましたが、御別れしてから九ヶ月目に、市區改正と云ふ事を耳にしまして、それから間もなく測量師が来て、大きな聲をして土地を測る、續いて土木師が来る、土方が来るといふ有様で、その結果、とうとう私共の方の側が切取られて、三間幅のあの道が、九間幅の広い道になりました。道がきまると、今度は電氣局の工夫が大勢来て、電車路を造りました。さうして先月五日に電車の試運轉がありました。待ちかねた開通式の日には、朝か

指ヶ谷町
東京市小石川
區にある町
氷川
東京市小石川
社にある氷川神

ら何となく嬉しくて、弟などはさうでもない車の音を聞きつけては、幾度か飛出して、お隣の小母さんに笑はれました。それから一日待ちつくして、夕方に「電車々々」といふ聲が聞えましたから、行つて見ますと、「6」といふ番號を記した電車が通りました。この電車は指ヶ谷町から上野の方へ行くのです。表通では、開通祝の提灯が門毎に吊されて、氷川の方で花火が盛に上りました。それから毎日ごう／＼通つてゐますので、今ではすつかり馴れてしまひましたが、初の間は、銀座通へでも行つてゐるやうな氣がしました。電車が来て喜ぶ者は、表通の商人と遠くへ通ふ勤め人の方々で、こぼす者は車屋とお年よりの

方々です。私は何といつても賑かて便利になつたのが嬉しうございます。もとの御宅の界限が、こんなに變つた事を、御祖父様御祖母様に申上げて御覽なさい。きつとびつくりなさるでせう。今度の春休には、この變つた様子を見がてら、是非御出で下さい。御待ち申してをります。左様なら。

三二 雛 祭

朝日かゝよふ雛の壇
塵一つなく拭はれて
燃ゆるが如き緋毛氈

白がねこがね高蒔繪
飾る調度のかずくは
かはゆからざる物もなし
あな愛らしや雛祭り
桃眞盛りに晝咲きて
冠なまめく内裏雛
大臣左右に侍らせて
御食イモまるるか日の御座イモ
盛れる豆いりまめやかに
並ぶ官女が袖口の

あな美しや雛祭り

銀の燭臺灯ともして

夜は賑はふ雛の客

甘き白酒飲むほどに

お下げおけしの唄ふ聲

五人囁ももろともに

調べ合すと思はれて

あなおもしろや雛祭

武島羽衣
文學士、國文
學者

(武島羽衣)

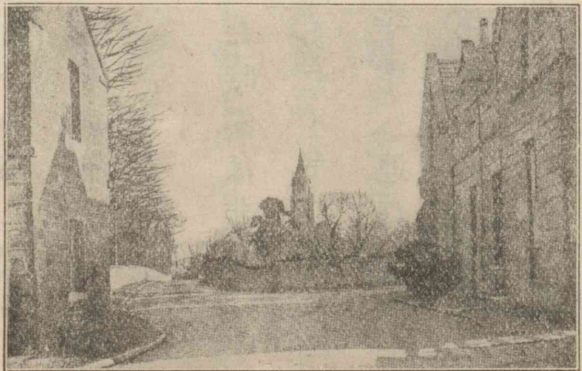
三三 イギリスの田舎 その一

リーズ
イギリスのヨ
ーク州にある
町
アーデント
ン
同州にある村

四時にリーズで乗替へて、四時四十分にアーデントに着いた。リーズを出る時は雪。アーデントに着けば月。停車場に下り立てば、心待ちにせぬでも無かつた山田君が迎へに來てくれてゐる。

山田君はケムブリッジの學生である。今から二年前に、同君が自轉車でこのヨークシャ方面を旅行した時、或日の暮方に、とある村の入口で、生憎と自轉車のタイヤがパンクした。通りかゝつた人に「宿は」ときけば、まだ何哩

アーデント村の一部



とやら行かねばならないといふ。その當惑のときに、全く未知の若夫婦が通りかゝつて、親切に自分の家に案内した上に、何から何まで行届いた款待の一夜を與へてくれたさうである。

その話を、この前ケムブリッヂで聞いた時、僕は非常にゆかしい物語と思つた。如何に親切で聞えたイギリス人にして、一面識も無い外國人を、心もおかず宅へ連れて來て泊めるといふは面白い。いつか折があつたら行つて見たいと思つたら、丁度山田君がこの四五日をそこで過す積りだから、遊びに來ぬかと誘つてくれた。僕は好機逸すべからずと飛んで來たのである。

赤帽もなければ、馬車もゐない小村の停車場として、山田君に僕の荷物を持つて貰つて、二人で、てくくと、月影に霧のかかつた雜木林の下道を歩いて行く。

イギリスの物持の領土といふは、何百萬坪といふ廣大な地面を一手に占領して、草ばかり生じて狩場か牧場に使つてある。その草原の中に、一條か二條の大道がつきぬけて、その道の兩側に、彼處に二三軒、此處に四五軒と、一町おき乃至二町おきに、家が建つてゐる。こゝもやはりそれで、行けども行けども、青々とした牧草の春めかしく生え敷いた野原ばかり、處々に思ひ出したやうな雜木林が、ぼしやくと立つたきり。のびやかではあるが、とんと趣が無い。この趣の

無い野道を、薄月をたよりに、山田君とかれこれ二十分も歩いた頃、右側に低い二階建の家が十軒ばかり並んだ所へ出た。同じやうな恰好だから間違つてはと、山田君が一軒一軒端から數へて見て、五軒目かの戸を叩くと、忽ちさつと戸が開いて、内からはつと光がさして、

「お待ち申して居りました。」

と夫婦が手を取らぬばかりにして、迎へてくれた。

敷居をまたげば、直ぐ客間で、ストーヴの火が盛に燃えてゐる。長椅子もあれば安樂椅子もあり、側にはピアノまで置いてある。これが自動車の運轉手の家かと思ひながら、事しい初對面の挨拶もなく、手輕に手を握り合つて、そのま

ま隣の間に通かれると、こゝは食堂と台所とを兼ねたもので、中央の卓子には、腹が空いたらうと、はや夕飯の用意が出来てゐる。夕飯と言つても、お茶にハムの一皿に、パンを添へた位のものだが、この氣のおけぬ夫婦の接待振が、何よりの馳走で、僕は今日始めて逢つた中とも覺えぬまでに打解けて、冗談口をきゝながら、且語り且食つた。食後は又別室に移つて、四人で煖爐を圍んで語り合ふ。電燈も瓦斯も無いかからアセチリンのランプをつけて、そこに吊した日本の紅提灯に灯を入れる。何がな僕等を退屈させまいとの心盡しに、雙六を出して來たり、歌留多を持出したりして、にぎやかに遊んでくれた。その中に細君の弟といふのがや

つて来て、ピアノを弾きだした。若い男だがよく弾く。主人のデューズは此處の教會の唱歌團の一人だとかで、自動車の運轉手には似つかはしからぬ優しい聲を出してテノルを歌ふ。細君も歌ひ出す。ベースが入つたならなどいふが、生憎此方にはベースの持合せがない。終ひには主人は「ネリー」にも歌はせよう。とて、犬を抱上げて、その鼻先で變な甲高い聲を出して聞かせると、犬は俄に妙な鼻聲を出して、如何さま歌ふやうな眞似をする。かくて犬まで加はつて、家内總がかりで騒いだ後、夜がふけたからとて、お茶にして、手製の酒も出してくれる。一二杯飲んだ後、二階の寢室に案内された。辱く謝してそのまゝ、

臥床に入つた。

三四 イギリスの田舎 その二

翌朝は早く眼をさましたが、火の氣の無い田舎家の朝の寒さが身に沁みて、起上る氣にならぬ。二人が床の中に仰向いて天井を見上げながら、
「一體、こんな家はいくらするだらう。」
との話が始まる。

「自動車の運轉手といへば、大した収入もあるまいが、とに角、小綺麗な客間も食堂もあつて、その上、堂々たる日本の紳士を二人も泊めるほどの寢室が用意されてある。お

まけに、客間には一台のピアノが据ゑつけられて、部屋といふ部屋には美しい敷物や毛皮が敷いてある。日本から見ると、これだけ生活の程度が高いのだらう。」
といへば、

「成程、高いには相違ないが、そこは方便なもので、イギリスの家賃といふはべらぼうに安い。この家など四間あつて、別に物置が一棟ついて、多少の畠まであつて、家賃は一週僅に二志、日本に直せば月四圓にしか當らぬ。パンは宅で焼いて、野菜は裏に作る。小鳥や兎はそこから捕つてくる。食料品とても何程もかゝらぬ。あのピアノなども損料貸で、一年の約束をすれば、嘘のやうに安いのだ。」

さうだ。」

と山田君がいふ。げにもイギリスは、心掛一つで、安くも高くも暮される所である。

何時までも他人の財産を數へてゐるでもあるまいと、二人は起出て窓から見ると、見渡すかぎりの野もせに霧がかゝつて、遙かに高く、川の上に架つた棧道を、汽車の通つて行くさまが田舎じみて面白い。入口には、主人が湯を持つて來てくれてある。靴も磨いてくれてある。下りて朝餉の卓に向ふと、「お宅の平生の通りの御馳走で。」といつて置いた朝飯が、鹽豚一皿にジャムにお茶。四人でわやく語り合ひながら食べる。氣のおけないせいか非常に旨い。

山田君に連れられて、ぶらりとその邊を歩いて見る。この地主は、二代前に羊毛の取引で盛に儲けたのを、悉く地所に入れて、見る通りの大地主になつた。このアーデントン村は殆ど擧げて此の地主一人の所有で、寺も學校も彼の建てたところ、村の家々の多くも、彼の召使や小作人が住ふ處で、さもなければ、それ等の人々の爲に出來た店屋に過ぎぬ。これ等の家が集つて此處に四五十戸のアーデントン村が出來た。村になくは叶はぬ鍛冶屋と指物屋とはあるが、洗濯屋が無いから、家々で思ひくにする。仕立屋が無いから、夫々細君がリーヅ邊から材料を買込んで、自身で裁つて自身で縫上げる。それ程の開けぬ小村でありながら、流

石に西洋は違つたもので、飲料水は山から鐵管で引いて、水道同様に栓一つで自由に水が使へる。便所は防臭の設備がよく行届いてゐる。グローサーに行けば、この小村の名所の繪葉書なるものが立派に出來てゐる。かういふ小村のグローサーといへば、乾物屋、八百屋、荒物屋、唐物屋、藥屋、繪草紙屋を兼ねて、何でも無いものはない、何でも屋である。時には午後の茶まで飲ませるから、喫茶店をも兼ねてゐるわけである。

暫く日本語を使はなかつた二人は、心長閑に日本語を高々と話しながら歩いてゐると、通りかゝつた巡查二人が變な顔をして僕等の方を見ながら、何と思つたか、グード、モーニ

ブヨークシヤ
蒸團子のやう
なものに、牛
肉をかぶせて
食ふ

ングと丁寧に挨拶して行過ぎた。
晝飯には、細君が自慢のヨークシヤ、ブディングを二皿平げ
て、兎の肉に薯を添へたのを一皿食つて、宜い加減に腹がは
つた。三時過には、主人が僕等を案内して、細君の兩親の家
を訪ねる。行つて見ると、人の好きさうな親父が、泥塗れに
なつて杉苗を植ゑてゐた。

僕等が明日は立つといふので、村に馴染の多い山田君の爲
に、別れの挨拶にと、次々にお客が来る。妻君の兩親が来る、
村の指物屋が来る、隣の主婦が娘を連れて来る。これ等が
煖爐の側にゆつくりと腰を下して、別れの挨拶とも覺えぬ
悠長な物語を始める。「とてももう二度とこんな處へ来る

杉村楚人冠
名は廣太郎
東京朝日新聞
記者

義光
源義家の弟
時秋
義光の筆の師
なる豊原時元
の子

ことはあるまい」とか、日本へ歸つたなら話の種になるだら
う。とか、言はなければならぬことでもないことを、長々と話
し込んで、くりかへしく「御機嫌よう。」と言つてくれた。
一同を見送りながら外に出ると、この夜十五夜の明月、野面
は、煙にとざされたやうにかゝる薄霧。——夕方までこつん
こつんと槌の音がきこえて、煙突の上に火花の見えて居た
隣の鍛冶屋も、はや森としてゐた。 (杉村楚人冠——戦に使して)

三五 足柄山の秘曲

義光終に時秋を伴なうて東に向ふ。美濃を過ぎ尾張を越
え、參河・遠江を経て駿河に入り、伊豆の國府より路を東北に

取りて進む。竹の下を過ぎて、山路を辿ること若干丁、漸くにして足柄明神の前に到る。義光轡を駐めて、時秋を顧みつゝ告ぐ。

「此の先に關所ありて、猥りに人を通し候はず。我はもとより覺悟の身、關を破りても過ぎ候はん。和殿までかゝる罪を犯し給はんは、由なきわざにこそ。いざ、此處より引還し給ふべし。」

懇ろに説諭せども、時秋猶も聞入れず。

「近江にてすら還り候はざりしを、いかでか、此處より引還され候べき。唯々何時までも具し給ふべし。」
飽くまでも共に陸奥に下らんと欲す。義光始めて心づく。

「和殿の胸中今こそ知りて候へ。さほど切なる望を懷きながら、色にも言葉にも出だし給はざりしこそ痛はしけれ。いざ坐し給へ。」

義光ひらりと馬より下れば、從者楯二枚を芝生の上に敷く。義光時秋相對してその上に坐す。

父
豊原時元

げにや、時秋の身には一つの望あり。幼にして父に別れ、年長じて父の業を學ぶ。日夜心を勵まして業を學べば、其の技いたく進みて、今は亡き父にも劣らず。「家寶の笙譜傳へて左兵衛尉殿の許に在り。折もあらば、承傳へて家道を全うせばや」と、常に義光の許に行きかよひて、親しく交ること數年。この度義光の陸奥に向ふを知りてより、固く思ひ極

左兵衛尉
源義光

む。「もし永き別れともなりなば、我が家の業長く絶えなん。此の上は俱に彼の地に下りて、傳授を受くるの外はあらじ。」業のため藝のためには、路の遠きをも厭はず、身の危きをも忘れて、かくは遙々具し來れるなり。義光徐ろに時秋に向ひて告ぐ。

「大食入調の二曲は、和殿の父より義光に傳へ給へるもの、義光亦固より和殿に傳へ候はん。奥州へ下りてよりは、兵馬忙しくして、却つて其の暇なかるべし。いざ、此處にて傳へ候はん。」

箠の中より取出でて授くる祕曲の譜。時秋恭しく押戴き、天に歡び地に喜ぶ。

「笛や候。」

問はれて、時秋、

「これにこそ候へ。」

懷を探りて取出すは傳家の笙。折柄彌生の空淡く霞みて、弓張の月朧に影を宿す。義光やをら笙を把る。十指軽く排すれば、參差の聲長く短く嶺を渡る。山靈出でて聽きぬべし。一曲清く奏すれば、婆婆の影高く低く天に翻る。仙鶴來つて舞ひぬらん。時秋心耳を澄ましてしみくと聽く。感極まりて涙膝に落つ。この夜は此處に留りて、通宵奥義を談ず。談漸く盡くれば、天漸く明く。

「この上は最早奥に下るの要もあらじ。此處より京都へ

還り候へ。」

義光暇を與ふれば、時秋いたく打驚く。

「こは思ひも寄らぬ仰かな。某の望こそ叶ひて候へ、君の御恩は未だ報い奉らず。たゞ何處までも命を限りとこそ存じ候へ。何條この儘立歸り候べき。」

はらくと涙を垂れつゝかきくどく。義光も亦目をしばたたく。

「和殿の志は悦ばしうこそ候へ。さりながら、我、奥に下るからは、生きて還らん心なし。兩人俱に果てなば、誰か此の道を傳へ候ものぞ。和殿の父の我に傳へ給へるも、此の道を失はざらんが爲にして、我のいま和殿に傳へ候も、

此の曲を斷たざらんが爲にこそ候へ。和殿若し死して此の曲長く絶えなんか、亡父の本意にも戻り、義光が微衷もあだとなり候はん。軍の方には和殿なくとも事は缺かじ。斯の道には和殿なくば誰かは繼がん。我に従はんは私の情なり。藝を守らんは公の道なり。くれぐれも義光の言葉に従うて、此處より御歸り候へ。」

時秋聞くより、涙瀧の如し。

「さても情なき事を仰せ給ふものかな。君なくば争でか此の曲を學ばれ候べき。厚恩の師を見棄てて歸らん事、道の爲とは云へ、得こそ致すまじけれ。」

彼方に道を思へば、此方には義を思ふ。並みある従士聞い

熊田葦城
名は宗次郎
新聞記者

てみな涙を垂る。義光なほも懇ろに説きさとすこと再三。
時秋今は是非に及ばず泣くく別れを告げて西へ還る。
足柄の山高く月清し。其の人滅ぶと雖も其の名とこしな
へに滅せず。
(熊田葦城—日本史蹟)

大正女子國文讀本 卷二終

大正七年九月廿八日發行
大正七年十一月廿五日發行
大正十三年九月十日發行
大正十四年一月五日發行
大正十四年一月十日發行
訂正再版發行
修正再版發行
第一修正訂正發行
第二修正訂正發行

大正女子國文讀本第二修正版 全拾册
卷二 定價金參拾九錢
大正十四年四月一日發行 金六拾六錢

著者

東京市外野大塚千六百二十五番地

保科孝一

發行者

東京市牛込區白銀町貳拾九番地

會社 資育英書院

右代表者

目黒甚七

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十八番地

白井赫太郎

印刷所 精興社



發行所

東京市牛込區白銀町二十九番地
振替口座(東京)七四二番

會社 資育英書院

東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

目黒書店

小田君江

第一學年
小田文子
橋本

